ル 4
5325
1

名所圖會拾遺者
山城州之都邑山
川之美神祠佛樓
之勝分毫末於短
簡籠千里於寸陰

分類 了3
番号 75(5)
通番 1

門ル 4
號 5325
巻 1

<49-1952>

所謂能居然而辨
八方者乎哉夫徒
有勝情之具者實無濟勝
遊之惟當以汉

天明丁未九月

鷲尾大納言藤原隆建卿

櫻寧主人

凡例

一此書は前編に漏たる所拾ひあつめ今の風景がたがへて圖に
換寫し其由縁を記し付る法とても佛院の塔頭末派の子院等へ
際限あらされは咸へ載ぬ年舊く名の高れを撰ぶ録也

一前編の圖中に遠景の畫あり今これが微細に圖しく其封境が
精くあらへは大悲山牛尾山の麓なり

一圖畫後編にあつかく文談なれは前編に出たり文談前編に在ぬ
圖畫なきは後編に見へたり両編應照ぶく其全を知るべし大度より
至つては前編に載せといへども再書しく漏たるを補ふ北野社
東福寺の類なり

一古人の居所は舊記歌書などにより其地を考これを載ぬ土人乃
口稱も亦奇なるは除くなるもあらはれば粗これが志はは

一引書の長文なるは其要が摘ぐ畧書也

一洛中神社佛閣の圖ハ其ことくなる前編に出たり拾遺ハ街衢小路ヨリはしらゐる小祠子院なれど画するに風系なし因茲大社の系礼ハ多く圖をしハ四時游観の形勝を寫す

一圖中の間々に大画あり強名所古跡にかくならぬ其邊の地勢にしたがく風流の系氣を畫するその之旅行の人道に迷ふて里人に聲を上ケ居る林又ハ野原ハ往来するに暴風に適ふべく笠ハしらゐ林などの類なり其餘ハ前編の凡例ハまゐらく両編ハ曉し見る画さなり

拾遺都名所圖會卷之一目錄

平安城

公卿拜賀參內圖 同朝賀圖
王城之解
大內裏封境
五所八幡
長福寺
佛陀寺
昆沙門堂
今宮御旅圖
稱念寺
智惠光院
西方寺
京師之釋
御靈社例祭圖
上善寺
光明寺
京極八幡
寶慈院
福大明神
本隆寺 千代の井
惠光寺
不動堂
平安興基
九重之濫觴
鶯宿梅
天寧寺
阿弥陀寺
飛行院
道正庵 稲荷社 解毒圓
興聖寺 錦嚢圓
三復荒神
天道社
紅梅殿 梅洛碑
四神之訳
洛陽之事
曙櫻 靈脊神社 間外庵
西園寺
十念寺
金龍水
大峯殿
超勝寺
獄門寺
無量寺
北野菜種御供

北野 北立社 繪馬堂
白左丈社 無隼塔
朝日寺 御文庫
煙の宮 経所
艸冢銘 竹画碑
手向山丹楓 祝壽碑
舩宮 忌明塔
連歌堂 文子社

茶師堂
西雲寺
薄法淪寺
清和院

蜘蛛塚
寶樹寺
和光院
西京

大將軍社
長寶寺
東光寺
法蓋寺

超圓寺
普門寺 映山紅名所
西光院 人麿像
立本寺

内野
國生寺
祥光寺
福勝寺

慈眼寺
觀音寺
華開院
淨篤院

西蓮寺
出世稲荷
梅雨井
松林寺 ゆもてる

稲荷荒神
順興寺
大學寮舊趾
土橋稲荷

滋野井
二條殿家
和泉井
少將井 同天王社

伊勢御家
鉢児祇園參
曇華院
不動堂延命院

業平卿家
悪源太旧蹟
祇園會祭禮圖
成範卿家

飛鳥井
三條右大臣定方卿家
法泉寺
願樂寺 渾天儀

定家卿家
白山社
布袋茶師
紫式部家

常盤井
高辻殿大滿宮
遣迎院 玄水井
本禅寺

安禅寺
行事官神明宮
梶井大滿宮
見性寺

三福寺
聞名寺
妙傳寺
大恩寺

教安寺
寂光寺
信行寺
要法寺

空也堂踊念佛
安春寺
了蓮寺
燈爐堂

聖光寺
法然寺
空也寺
乗預寺

德正寺
後成卿祠
南岩倉
鐵湯塚

七夕梶葉流
大江公資家
御射山諏訪祠
任心院 見沙門堂

鼠突不動
大師堂 名椿
阿闍梨諸社巡
和歌所舊趾

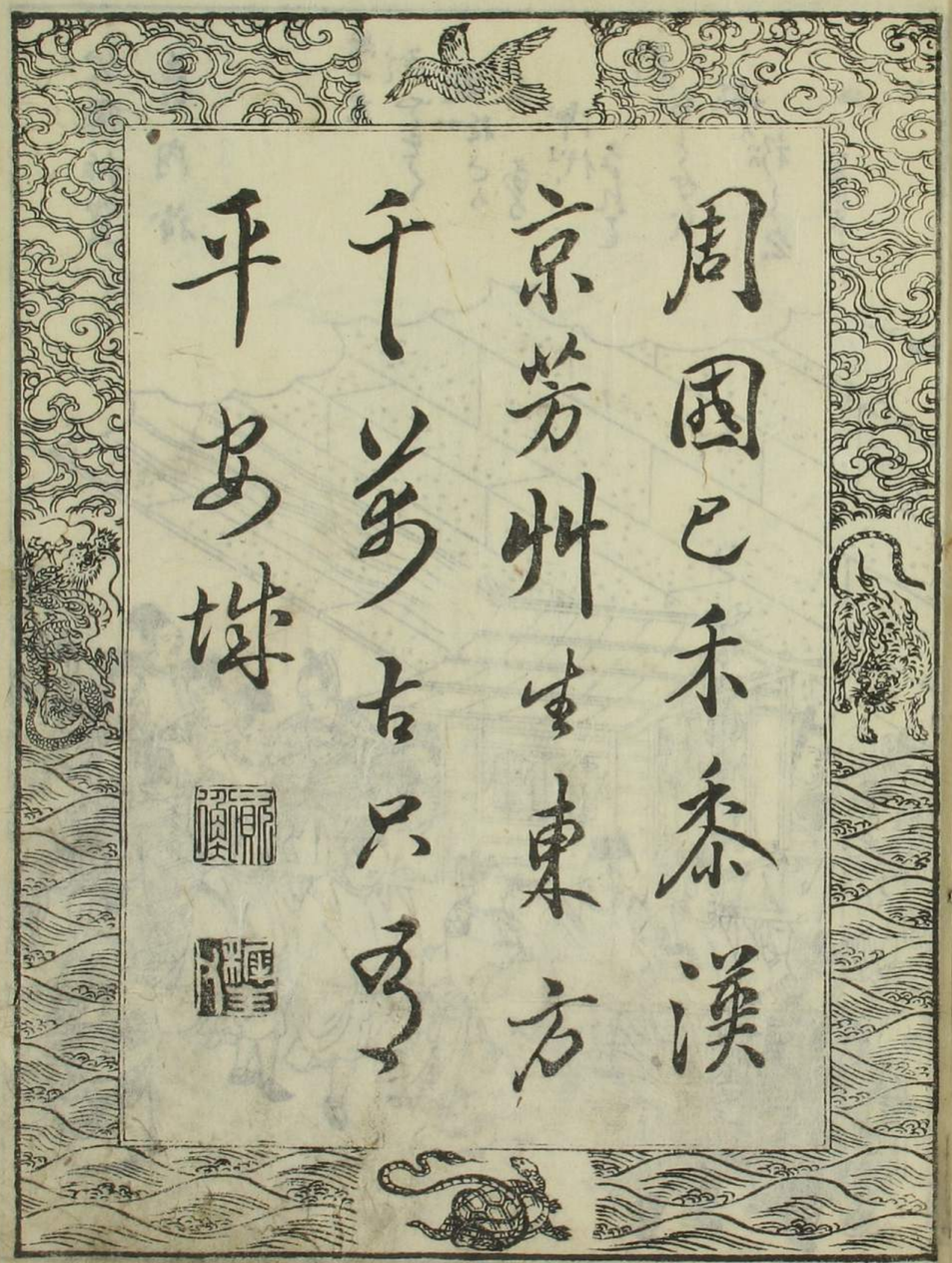
元ちん女祠
六齊念佛
山王社
午頭天王

肉桂水
亀龍院 亀茶師
道祖神
平將門祠

都町踊
飛梅誕生水
大泉寺 親書聖人 同行
火尊社

人麿社　一道院　鉄子祠　本行寺
相逢祠　児茶師　又旅社　三寶寺
正運寺　隼祠　水葱宮　壬生菜畑
休務寺　聖徳寺　壬生寺鰐口鑼　一夜天神
月輪寺　歸命院 五香湯　中堂寺　長圓寺
本圀寺方丈 同塔頭名蹟　源頼義家 耳納堂　沛影堂扇折　三善清行家
堀川御所旧趾　下間家　桂宮旧趾
織部京坐舗　天橋立　本宮塚 新宮祠　施茶院杜
阿佛塚　稲荷迹挑灯　東寺神供　國姓爺寓居
源頼光館　猪隈祠　高瀬川　羅城門舊蹟
洛外惣土堤濫觴

周國已禾黍漢
京芳州生東方
千萬古只可
平安城

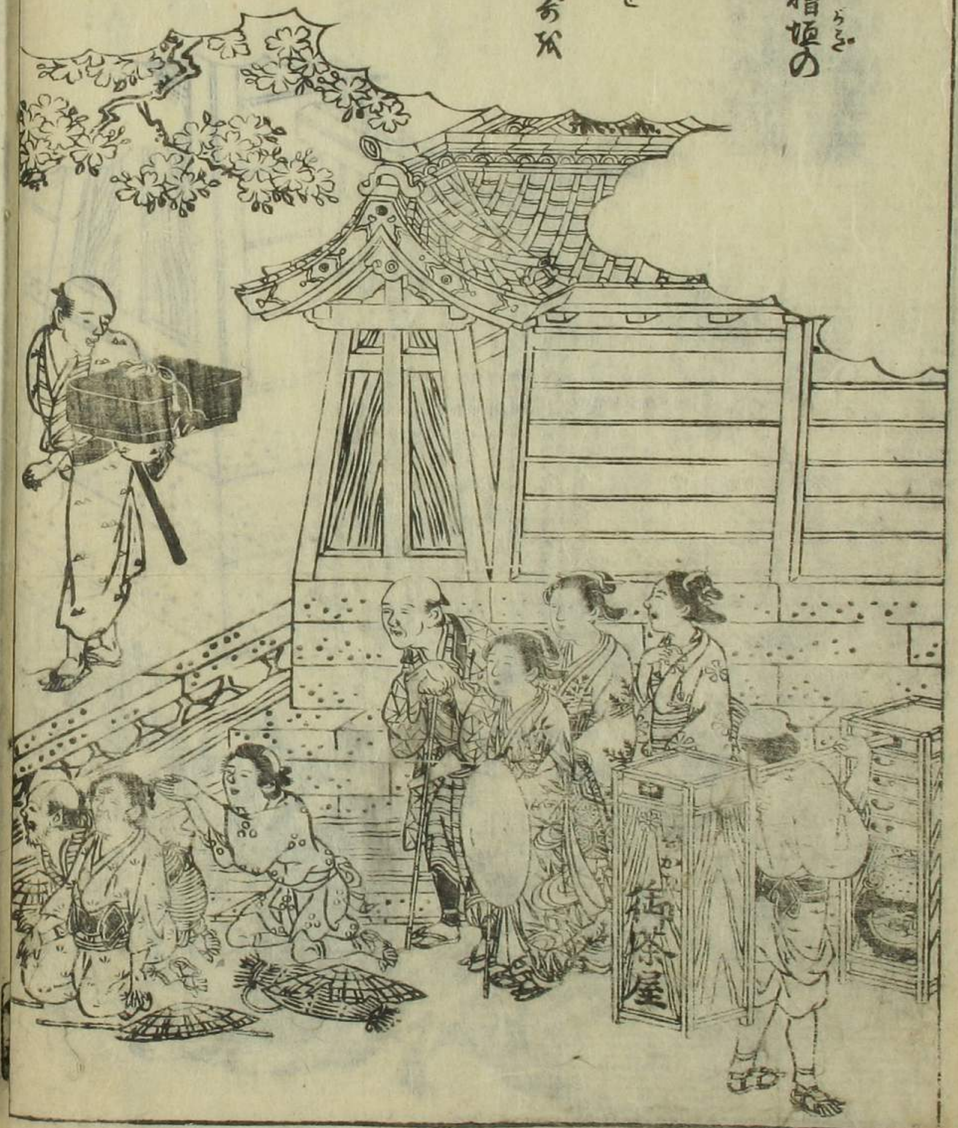


公卿拜賀
名内裁

續千載
民やすく
國おさまる
御代
なれを
君ぞ
ちとせ
詠
祈る也
一条内太に

九重天上来儀鳳
五色雲中拜衮龍

元日ハ檜垣の
茶屋ハ
内裏へ
入ゆるを
見えく
狂歌ハ
よめ



初空ハ
玉の川の
茶屋ハ
新々ゆり
竈姫へ
其一つ
あり

平安城の興基ハ人皇五十代乃帝　桓武天皇延暦十二年正月甲午朔旦
詔のりて大納言藤小黒麿左大辨古佐美等ヲ山背國の勝地ヲ視
サしむ勅ヲ奉ひろかりこの群縣ヲ歴て四神相應し有徳無疆ノ皇州之速に
宇多邑ハ地勢郁郁こゝめ往代不易の都ヲつくるへし
新都を開き帝城を造営ん事を
園基同年二月辛亥の日參議治部卿壹志濃王を加茂大神ニ遣し
而て遷都ノ事を告サしめ給ふ三月己卯の日　天皇菅野の行幸
ありて新京乃地理ヲ　叡覧ましく五位已上及ひ諸司主典ヲしく
役夫を進免新都の宮城ヲ造営し九重を劃き四方ハ垣域ヲ
隍ヲ環らし廛ヲ興し繩ヲ絶ち鴻業ヲ啓ク同十三年
十一月ノ詔ありて山國ハ山河襟帶し自然と城ヲなすゆへ山背の
文字ヲ改免玆ニ　即郡ヲ平安京と號なふる　已上日本紀取意畿内
の次第ハ上古ヲ大和國ヲ首ヲ垂し玆ニ永和二年十月　勅しく改め

山城國ヲ六十餘州の冠首し給ふ　續日本後紀　桓平安の都ヲ興基るニより
今ハ　神代ヨリ至ヲて一千有載遷都ヲ行ハ中華ノミいまゝ異例ノし
寔ニ天津日嗣の位しめしてより神嘗祭ノ清川のほとりに
の松乃葉のちるせゞして億兆の歳ヲ踊らんことを知ラまる
四神相應の地とて事ハむり聖徳ヲ子蜂巣ノ如のゞり給ひて此
都ヲ見めぐらして四神相應の地と百七十余年あて都ヲ遷ヲてら所
ほゞき所ヲうと宣ひるゝをや　神皇正統記　四神とハ東ヲ蒼龍
西ハ白虎南ハ朱雀北ハ玄武とうづけて四方ノ神ノ鬼神ノ象
あり二十八宿ヲ四ッ割ヲて七星ヲ以四方ノ配して
其星の象より起る名ヲ宿の在所ハ時ノ東ノ空ニもる又西ニも運るそ
きハ抱ら尾箕の七ッの宿ヲ並べ房心尾箕ノ龍の形ニ象ヲ東ノ方と
ハ斗牛女虚危室壁の七ッの宿ヲ並べ虎の形ニ象ヲ西の方とハ奎婁胃昴
畢觜參ノ七ッの宿ヲ並べ鳥の形ニ象ヲ南の方とハ井鬼柳星張翼

軫れ七ツの宿の並びや蛇れ亀を絡ふぬしをれを小の方ゟ次、東ハ木ぶそ青し
南ハ火みそ朱し西ハ金ぶそ白し北ハ水みそ玄し等の星れ象四方の名ふ配ゑて青龍朱雀白虎玄武と
いふり 東涯制度通取意 爾雅れ釋天疏ふも四方ふ皆七ツの宿あり各一ツの形をうん
東方龍のぬし西方虎のぬし皆南を首ふして尾ゟを南方ゟれぬし小方
亀のぬし皆西を首ふして東ゟ尾ゟを礼記ふも四神の旗れ事を四神の中ふ
圓圖門あり是 内裏ふ準をゑ准南子ふも圓圖ハ本天の紫微宮乃
門をゑまれ玆借て 天子の門ふ稱をゑゑ文選詞ふハ天門の圓圖ハ禁門
乃稱とをゑゑまれゑの謂ふよりう四神相應の地といふをりう

王城とハ王ふ往ふして天下帰往の貌ゑ城を盛ゑ國都玆盛受る乃貌ゑり
又都城ふ二重れ差別あり京城皇城宮城とハ京城とハ總て都をゑ則
平安城ゑ皇城とハ皇居の總構の内をり諸司百寮ゟとくく具内ふる
所謂大内裏とハ是ゑ宮城を皇居之 制度通
京師とハ詩經公劉篇陟南岡乃覩于京京師之野ゑ是を節義ふ都邑を營
ゑ居處をゑハ朱註ふ京ハ高き丘之師ハ衆ゑ高き丘ふ衆くゟ居をゑゑり
蔡邕ゑ獨断ふゑ天子都をゑ所を京師とあり京ハ水ふたゑゑて地下乃
多きゟをゑゑふ過ゑゑゑれぬし地上の衆きゟをゑ人ふ過ゑゑゑれぬし京をゑゑり
師を衆ゑ大衆乃居をゑ所をゑゑて 天子の都ふゑゑり兩雅ふゑ天子高き
ふ居して遠き所視乃意ゑ師ハ衆ゑゑて人民衆くゟて丸聚ゑの謂ゑ

九重の都とハ禰ぎゑハ周禮匠人職ふ出ゑゑり西人營國方九里旁三門國中
九經九緯云云註云方九里ハ周の代れ天子の都の廣ゑ四方ふ三門ゑゑて合て
十二門ゑ十二門ふ通じて十二ゑゑ國中ゑゑ皇城ゑて宮城れ事ふあゑ玆
經緯とハ道條ゑて南北を經ゑ東西を緯とた一門ゑふ三條乃道ありて
東西ふゑゑ九條ゑゑ九重とゑ都とハ華の訓ゑ花浴ゑをゑづく

月讀 昔ゑゑ都ゑ名ゑゑ玄ふ中ゑゑゑゑ 後京極
玉葉 玄ふ上ゑれゑゑふ花ゑ名ゑゑ 院御製
夫木 ふふくゃゑくゑ庭ふむゑれゑ袖を覆ゑゑ世乃初ゑ 後成

御霊神事

八月十八日

洛陽 諸書略諸畿内ニ出ル孔安國の註ニ洛水の間ニ一南ハ澗水ニ迎ヘ二爾雅ニ山南水北ヲ陽ト云ヘハ洛陽ト云ヘ洛邑ハ洛ニ臨ミ邑アル故ナリ時都ヲ洛陽ニ移セシヨリ後ハ本朝ヲモ洛陽ト稱スルニヤ本朝ニテハ古ヘ平安ノ名義ハ前漢ノ長安城ヨリ出ツル西大宮ニ至ルヲ平安舊圖考ニ精シ

大内裏 拾芥抄ニ京程ノ圖ニ云南ニ十町一條ヨリ二條ニ至ル東西八町東大宮ヨリ西大宮ニ至ル又平安舊圖考ニ精シ

我國の數ヶ郡のうちもてはやし 公朝

繁きうへの位乃ことのこ松ニ系ふさ〳〵や代のそめあそん 中務卿親王

月清 むつことの庭ヶ花ニ風のこゝろおそき宵の春雨 後京極

鶯宿梅 傳云此梅ハ古西系紀貫之カ家ニアリシ後世寺トシ梅光院トアラタメ應仁ノ後相國寺ノ内ニ移ス今方丈ノ庭ニ殘株アリ

大鏡曰 天暦の御時清涼殿の御前ニ梅の木乃枯ニうへ給ヒ西京ニ遣ハシ植ヘサセ給ヒケルニ

うつす木のかりそめ事と思ふらんこゝろの内ニ春を待ちつゝ

たゞ刕ニある事ニてそこそこニ系ふ家のなかニ梅の木ニ

拾遺 勅ふちはかまやしくとも見てゆかん色のかぎりの宿の梅ニてこゝろ

曙櫻 上系鞍馬口通小山口ニ臥庵トアリ

宗みつて開基ノ実験六代ノ孫和尚中興ノ伯珣和尚佛殿釋迦佛觀音地藏ヲ安

かをみり松を夜ふりそらの櫻なのけかれいそく花の色ニ 後水尾院

後水尾院尊影 當庵方丈和安置ス 林五寺普明院ノ御筆画ニ二尺餘寶簡院女宮ノ御作讃アリ此帝ノ御製ニテ曙寺トモ

靈符神社 當庵ニアリ金泥ノ像長四尺ニ寸守リ一安陪晴明勅ヲウケテ開眼ストモ所ノ靈驗日々ニ新ニシテ常ニ詣人多シ近年社檀建立アリソノ奥ニ當ノ東ニアリ

五所八幡宮 同街山口ニ臥庵トアリ羅ノ新田大隅正八幡己上ヲ後柏原天皇勅シテ此地ニ遷シ申シ所ヲ効ク所ノ八幡ヲ社内ニ神祇拾遺ニ見エタリ故ニ所ノ別宮ト号シ遠境アルヨリ近年足利家ノ尊ノ御社内ニ禅刹アリ絡繹禅師ノ開基ニテ東寓ヲ以テ院ノ屬ニ開基ハ春谷盛信上人

上善寺 同街ニアリ淨土宗知恩院ノ末寺ナリ 後水尾門院 後柏原院 西帝ノ戒師ナリ

本尊阿弥陀佛 行基ノ作坐像二尺餘古ヘ林五寺ノ本尊ナリ寛永十一年九月九日後水尾院ノ勅ニテ當寺ニ移ス

善光寺如来畫影 化人ノ筆ト云ヘリ後柏原院ノ勅願所ニテ常ニ參詣アリ不斷念佛之道場ノ宝寺ヲ護ル人數達ハ方里ニ小僧數刕ノ

當寺ハ鎮西派未院ノ大廈ニテ塔頭寺内ニ十院アリ方丈客殿等ノ屋中真ノ如ク組テ弥生乃緑ノ櫻樹ノ如ク古ヘハ天台宗ニ今曹洞宗ニ開

萬松山天寧寺 京極通鞍馬口ノ南ニアリ 基ハ祥山吉和尚松平伊賀守候資勝

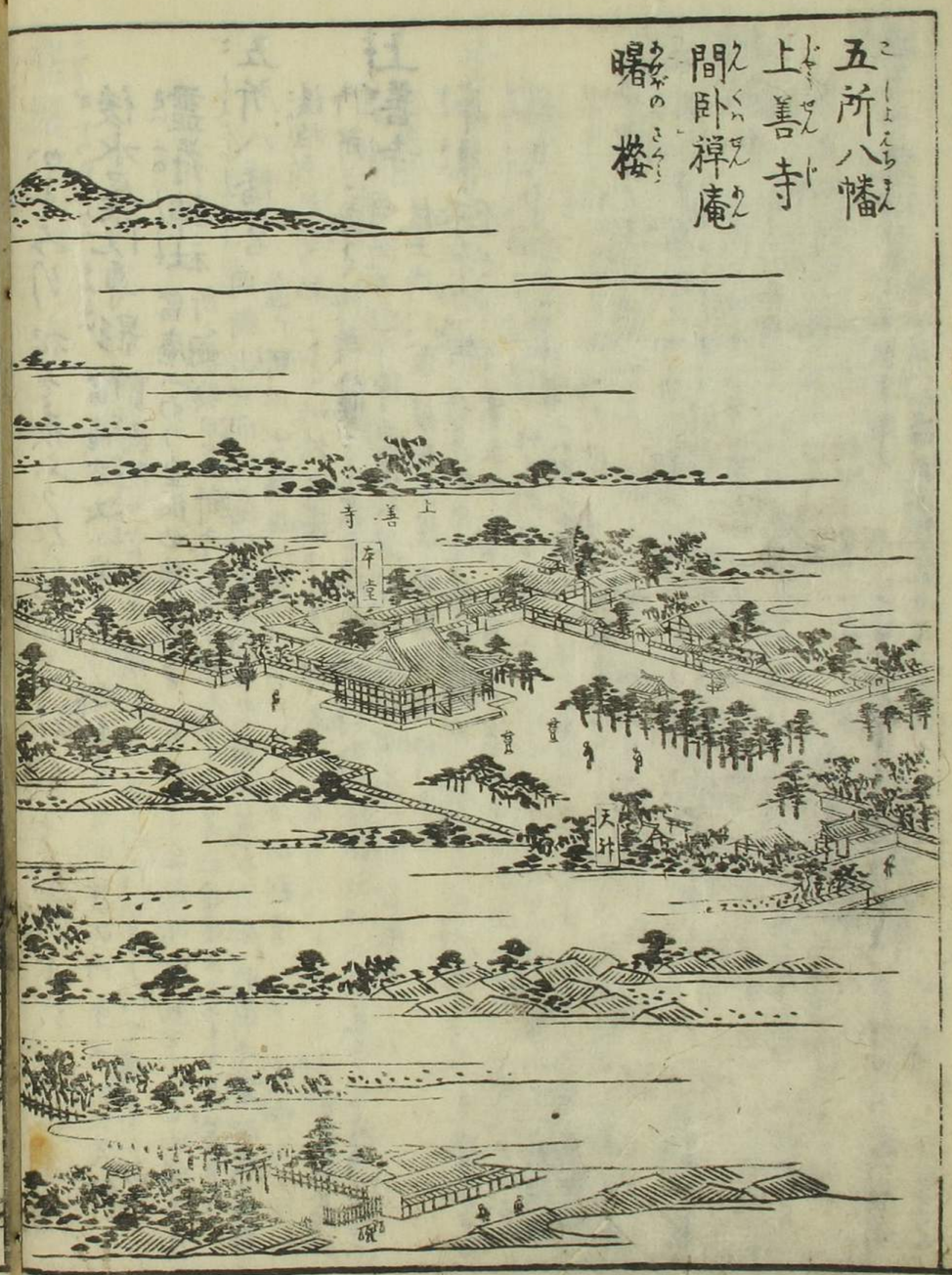
西園寺 日所天寧寺ノ南ニ隣ル淨土宗知恩院ノ末寺ナリ開基ハ覺勝上人初ハ北ニアリテ西園寺ト云ヘリ後ニ今ノ地ニ移ス

本尊阿弥陀佛 恵心ノ作坐像六尺計

地藏尊 寺内ニ安置ス恵心ノ作

威王山長福寺 日街條通橋ノ北ニアリ宗旨四宗一兼学開基無人如導花園院正和元年ニ建ル所ノ本尊不動尊 菅家ノ御作ト像一尺九寸四十八願巡ノ第十四番ノ札所ト云ヘリ初ハ岩屋山奥院ノ本尊ナリ

五所八幡
上善寺
間卧禅庵
曙の桜



光明寺　京極通條通橋の西にあり浄土宗百万遍の末に属す　本尊抱止如来　弥陀の慈覚の祀立像七尺余宇津宮入道蓮生筆ぶ抱止〻〻と云ふ人の西ぶこと沽ふもの

阿弥陀寺　同街光明寺の西隣る　本尊阿弥陀佛　弘法の祀坐像六尺計四十八願巡の　浄土宗百万遍の末に属す　賀十六番之開基八幡玉上人ハ

織田信長同信忠両公景　方ぶ海里に其之玄孫　同両公墓　戦死臣　教導墓塔

當寺ぶあり清玉上人両公乃帰依を受る沙人ぶあく葬法之書も初ハ上京大之

の東ぶあり天正年中ぶ地ぶうつせ

十念寺　同街今出川の北ぶあり浄土宗西ぶ流永観堂ぶ属ぶ開基ハ真阿上人足利義教公帰依しゐ人永享十二年七月二日寂を遺言ふ以て多羽川ぶね葬を六十六日

本尊阿弥陀佛　弘法大師の祀坐像　坐像ハ尺ぶ古い東ぶ向ぶ

佛鬼軍圖　一休和尚の筆ぶ佛地獄を祀つく無比の　足利将軍諸士念佛講名帳　當寺ぶ

楽城と〻ゐ人奉拝ぶぞ弥陀ぶ書どとゐぬ弥陀を教ふ　足利義教

口ぶふる人奉拝ぶぞ弥陀ぶ書どとゐぬ弥陀を教ふ　足利義教

佛陀寺　同街今出川乃北ぶあり帝王系圖之天暦六年二月四日朱雀左上皇佛陀寺ぶ於て落飾しゐ人之地　真阿上人

本尊阿弥陀佛　恵心の祀坐像八尺ぶす高き再興の時

京極八幡宮　上京猪熊門前西二町ぶあり古〻承極之條ぶありて寺祇承極寺と号し今昔物語曰

今日ハ承極寺の祭ぶ門前諸々と〻して賑ぶ式も亦奢ぶ乃ち時此寺ぶ機て力祇石ぬて様々の具名今猶頼ぶ石町と乃ぶ是京極ぶ盛衰記ぶ京極ぶ

応仁の乱後ぶ遷をとゐ人今ぶ承極寺と号ぶ寺記録無ぶ

中右記云寛治八年八月八日申時計　大学寮ぶ馳参ぬ神輿を舁立て田楽。獅子。鼓。笛。篳篥。

今日ハ承極寺の祭ぶ門前諸々と〻して賑ぶ式も亦奢ぶ乃ち時此寺ぶ機て力祇石ぬて様々の具名今猶頼ぶ石町と乃ぶ是京極ぶ盛衰記ぶ京極ぶ

今昔物語曰

高陽親王と申人ぬりゐ給ぬ帝ぶ奉ぬ給ぬ

多る京極寺ぶ寺ぬあるぞれ此親王の建給へる具寺の荒れ朽ぶ果ぶ

頃ぬりゐる秋ぶ天下早魃しゐ人る年ぶ

川の水を入ぐ此れ田ぶ具ぶ川も水絶ぶ

高陽親王長四尺計ぶ壇の左右ぶ手ぶ器を捧て立る形を祀つくる此田の中ぶ立

具持ぶ長ぶ小水を入ぶ具ぶ盛受て頬ぶ則頬ぶ流ぶ掛ぶ様ぶ造ぶ

を汲て長ぶ入ぶ具ぶ盛受て頬ぶ流ぶ掛ぶ様ぶ造ぶ

人市ぶ集ぬ有ぶ入ぶて見ぶ真ぶ喚ぶ

焼ぶしてあん止ぶ多ぶいみじき事ぶ覚ぬ

羽休山飛行院　柳原室町の西ぶあり古ぬ堂舎巍々と〻して今ぶ小堂ぶ

天狗ぶ名ぬ坊ぶ示ぬふりて未撰の墓ぶ　本尊将軍地蔵　役行者の祀立像二尺余

威得ぶ故ぶ未撰地蔵と云ぶ秘く書ぬ　愛宕山の開基慶俊和尚

慶俊和尚像　坐像一尺余　弘法大師像　坐像一尺余

金龍水 室町頭柳原の南町西側人家菓亭の傍にあり京師の名水の内にして水甚く清冷にして寒暑に増減なし茶の湯に可なりとて遠近より汲求む紫野大徳寺大心和尚の銘文ありて板面に書しるく井上に掲る

原此地は足利三代将軍義満公の館にして花の御所といひ又室町殿とも称す殿舎には金銀珠玉を鏤め庭中には百花千艸を聚む此所は殿内泉殿の旧蹟なるらん今近隣の町を惣門町築山町と名づく四方の巡に堀あり後太平記に見へたり東西に四ッ足門あり應仁記に載られ永徳元年三月後圓融院此所に行幸あり應永二年四月後小松院も行幸し給ふ同年四月義満公北山に金閣をいとなみて此所を子息義持公に讓り給ふ

南方紀傳云永和四年の春三月将軍花亭にうつり給ふ室町殿と号す其籬に遍く四季の花の種をうゑられけるゆゑ人花の御所と申し

花御所行幸記云永享九年十月一日御路は東洞院を南に行き中御門を西へ行き室町を少し武者小路を東に今出川を北へ北小路を西に行きて室町殿の四ッ足門に至る

管見記云永享十一月廿一日室町殿御移徒也

毘沙門堂 烏丸小頭柳の辻子にあり相國寺塔頭西の
入口の傍に稲荷庚申の社あり

本尊毘沙門天 聖徳太子の作寺説云足利義満公三百六十尺の塔を建らる應仁の乱に焼失て旧地を今塔之段といふ此堂は大塔より已前の建立と見へたり

明月記云貞永二年二月廿一日丙午毘沙門堂の花盛開くと云云

後愚昧記云應安二年二月十九日毘沙門堂に向ふ花一見すと云云

去る近年今出川花園井町の辺に毘沙門天を信ずる貴人あり宝暦十二年五月廿一日の夜天王夢中に告て曰是より東の大寺に毘沙門の像あり年歴久遠にして知るものなし迷途に出して諸人に結縁させよとくとて三夜同夢を見る不思議に思ひ即ち乃大なるは相國寺なりとかの寺に至て衆僧に夢を語る一人の比丘事の次第に山門の中重へ登りしにそかりしにも此尊像旅塔より常に人の登らざる所ゆへ人ありしをかけし

かの人の夢を語らせ一山乃僧侶に拝せしむ是は人々奇異なしとし即かの貴人に授く抹々夢中の尊容にまがひなしと感涙せざるはなし是を因縁なる縁を得て独り是を安置し

寶慈院 室町頭中林下町にあり禅宗日野家の尼公院主たり本尊阿弥陀佛 恵心の作坐像一丈計

開基は無外法尼其先は城陸奥守の女にて名を千代野姫といふ四十八願巡の第十二番之故に云々號千代野寺ともいふ

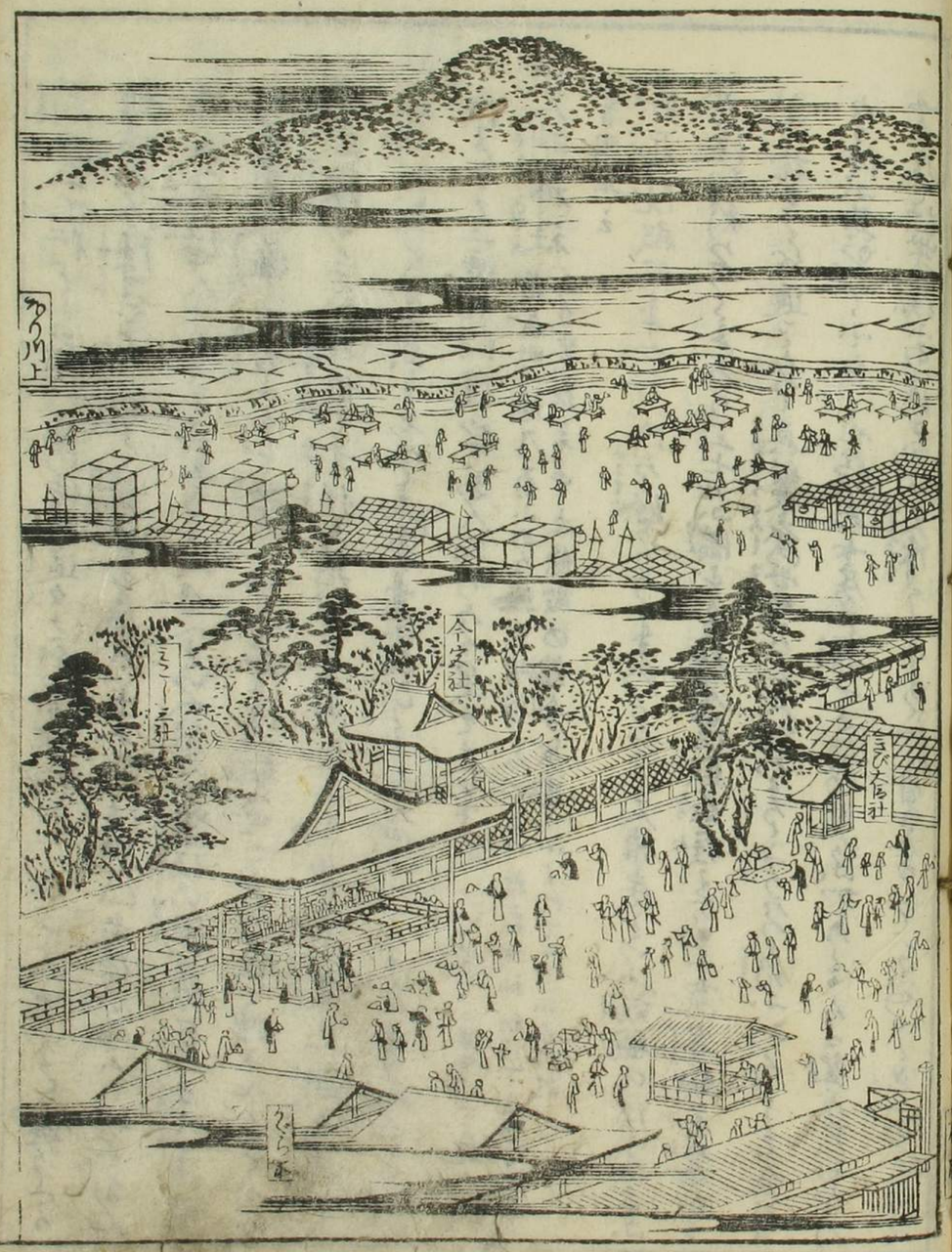
道正庵稲荷社 同所の西道正の辻子にあり道正庵の開祖道元和尚に随身して中華に渡る和尚所々隆盛越前國永平寺隆盛の中にして俄に病を發す既に息絶んとす時に一人の老翁来りて薬を授く忽ち痊ぬかの翁隆盛に云現に其薬を授けて人の病苦を救ふべし我は是日本三ツの峯稲荷の明神なりと云ひて帰りぬ隆盛本朝に帰つて子孫に伝へ諸人の病を救ふ其後隆盛の祖稲荷を神とし此所に勧請す是より道正と名乗常に元禄年中まで十餘代家名相續し曹洞宗一派の寄宿所とし解毒丸を調て今に至る

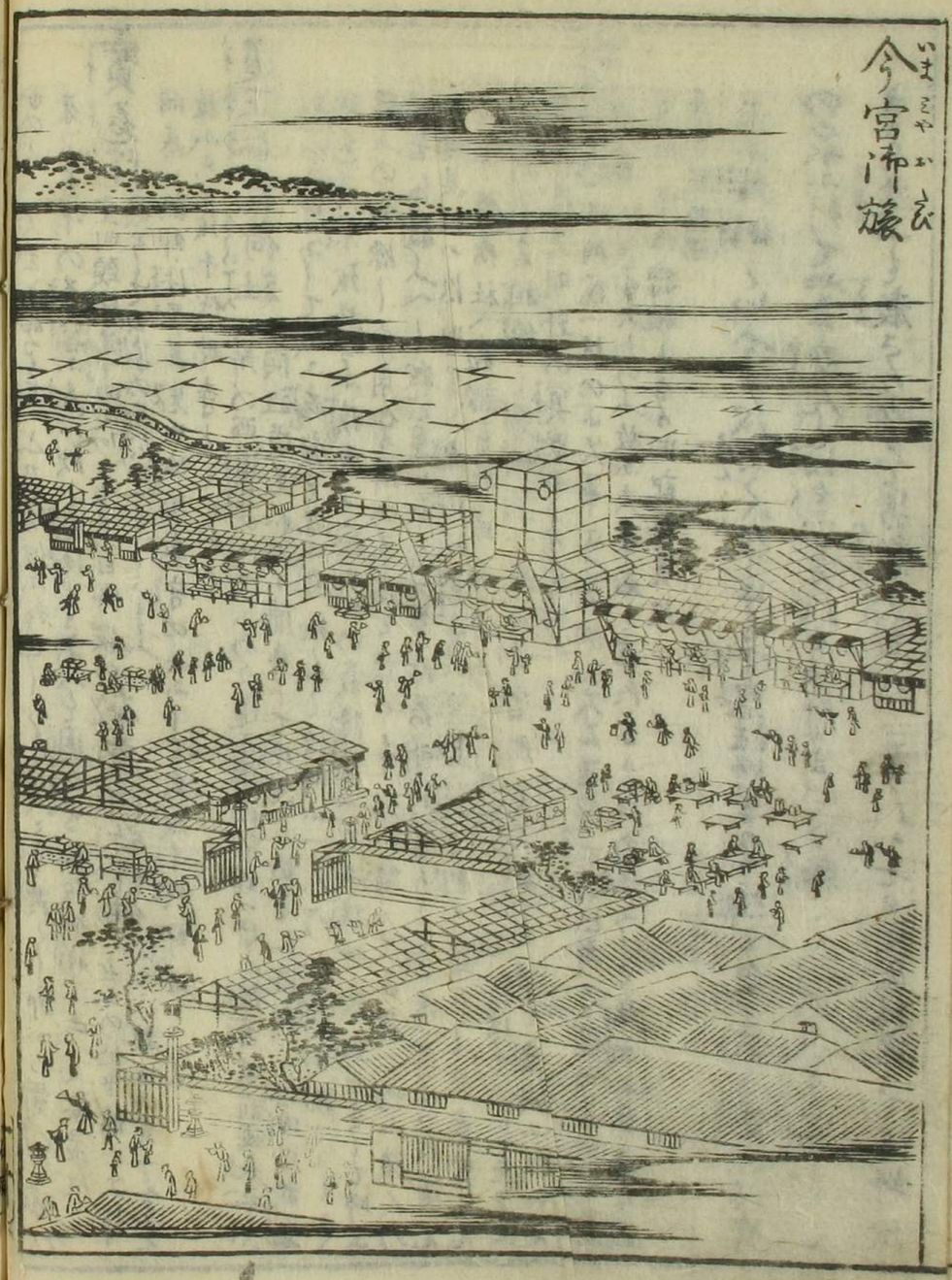
大峯殿 西洞院一條の北大峯辻子西側に大石塔あり古へは此所寺院にして役行者の修行ありしとて大峯殿と称し古代の形にて塔面に佛像を彫

今町中の持物とすの旧記絶失たり

今昔物語曰

京に外術といふ事を好く役とする下衆法師ありけり隣に有ける若き男此法師の家に行て此事習んと切々に云ければ法師が云此事輙く人に傳ふる事にあらず去く速にも教ふるを男懇に習んと云ければ七日堅固精進して法師が


今宮社


今宮御旅

前に立て行ども〳〵只山の中を遥々と行に己の附計に感って山中によく造りたる
僧坊あり障子を空開く瞻長なる僧乃出来ぬ法師いふ老僧に向ふて此男なん
去ぬ宮仕せんとそさうらへバ来りて候といへバ男ハ柴垣の辺に居たる房主の僧
曰其男ハ懐に刀を持たるぞ捜せといへバ若き僧馳寄て男の懐を捜さんとするに
密に懐なる刀を抜備て老僧ハ死かる其附忽ち老僧きへ失ぬ漸あれく
此所ハいづくなるやとせんだ大なる堂に只ひとり居しか遥に来りぬると思ひ
佗ましくも一條西洞院にぞあんなりける是ぞ大峯殿といへる寺に来りけるなり

福大明神社 葭屋町一條乃南にあり福大明神といへるハ荼枳尼稲荷明神初めハ下立売高倉にあり寛永年中九條殿の館舎を建るによりてここにうつれり

著聞集云

知足院殿何事やらん御望ありけるにや大権房といへる効験の僧に仰せ
乃法を行せられけるに二七日に満ぜる日知足院殿昼寝したまへるに女の容顔美麗なる
が御枕を通りけるを其鬢髪の本を捕へたまひけれバ縮にいひて[illegible]
なる僧にて其をつらぬきたるを女房見帰てさ返したまへかしといひける声いとやさしく
せ覚て此世の類にあらず天人の天降りたまへるにやとおぼしたまひ[illegible]とせんとぞ

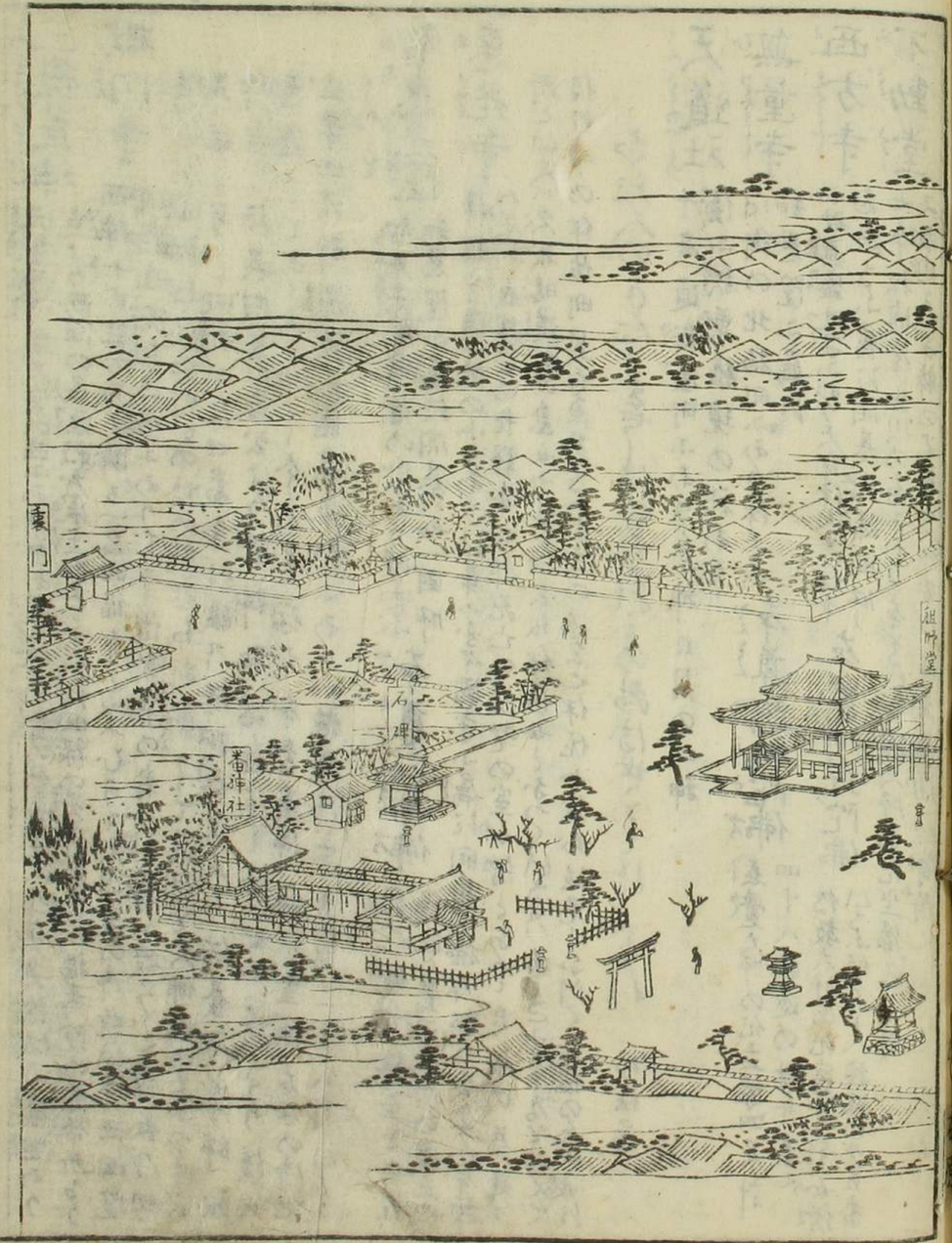
強く元止させたまひけるを女房なくなく引放ちて通りぬとおもひけるに其の鬢の髪さきれにありけり
行腕にくく御手にも御夢さめぬ幻に御覧じけれバ狐の尾なりけり
不思議に思召て大権房に仰して其様を宮しいひけれバいふも御念空しからずしく年来
厳重の事ありと覚ひつきしもの是ぞ狐に新ざるる事はいまされとも御覧を得る此日午の刻に
必がかなひくべし次の日午の刻に御悦の事公家より申されたりけるとぞ件の狐さ
尾ハ清き物に入て深く秘め蔵められけり其後花園の御くるれ御坊浴ゑ東洞院に御つくり
ありし時も祠をかまへて祝ひまつりける福大神としてぞあがめまゐらせける

圓通山興聖寺 小川の北天神辻子にあり禅宗済家開基ハ虚應和尚 後陽成院
本尊釈迦仏 仏殿に達磨像 後水尾院の勅額所之藤堂家より寄附 中華供覧盤の紗
安置る 比類なし 藤堂高虎の寄附之所なり世に
当寺にむかしより鎗 圓鏡弘む英傑山天真院より出し錦
えて方坂隠元禅師より授りしとなり

超勝寺 安居院二階町にあり浄土宗知恩院に属す
開基ハ尊蓮社鉢誉上人方丈の座中絶の後再興なり
本尊阿弥陀仏 役行者の作立像三尺二寸中将姫雲雀山房室の本尊なり
四十八願巡の第十一番

称念寺 西陣桃町にあり浄土宗源門流鎮西派に属す 本尊阿弥陀仏 恵心の作立像二尺五寸計
開基ハ称念上人 四十八願巡の第十番

本隆寺
千代乃井



三俣荒神　元誓禅寺通大宮の西にあり本尊荒神古より西陣の民屋数多崇上あまねく愛宕山福寿院の兼帯所なり

獄門寺　西陣七の社の西に隣る一名西福寺と云ふ仏祖四禄の多く葬地なり南に獄の像ありて寺僧罪の者に導を授くる慶長の初め秀吉公朝鮮征伐の時かの地の獄舎を耳塚と号し回向ふに依せ当寺に移し秀吉公より資料料地を寄附ありしが其時荒廃してありしを今小堂を建立像四尺計

天道社　千本通笹屋町にあり祭神日月の二神

儀ふに秋葉権現の社ありしを街の北柏町にあり泽宗知恩院に属す

無量寺　小社真盛上人の子にあり天台泽宗本尊阿弥陀仏

智恵光院　智恵光院通一條の小にあり泽宗知恩院に属す開基は権大都日安上人本尊阿弥陀仏

恵光寺　泽福寺通一條の小にあり法華宗本國寺に属す開基は権大都日安上人本尊

西方寺　小社真盛上人の子にあり天台泽宗

不動堂　七体私通今出川の南にあり本尊不動明王

紅梅殿　小祠宮東の門一町餘東にあり勧請の由致系編ふに及ばず傍に梅鉢の碑あり背文の東坊城大納言綱忠卿銘文撰跡共に久しく勤頁

菅公手植梅銘

鏡矣斯梅。韓乎含章。必弗瓊姿。黝儵耿光。祥風翕習。傳馨外方。侯躰侯根。孔蘭孔彰。允歓金石。多歴星霜。徳比聖擅愛均甘棠。鴻名有赫。億世無疆。

天満宮菜種御供　西京鞍負町小祠供所を安楽寺と号ふ毎年二月廿五日鳥羽院御宇天仁二年より始りて北野宮の御忌を執行せり其日の夜に入て御供田坂頭と号る家より太の神供のそなへ調へ御供所に餅つき本殿に捧ける宮司の面々相向ひ垂立る神前の階下に至って御供を宮司の一老二老に右指の供物を捧てあのく社おの供ふ大御供の飯と推盛て真上に黄菜花を挿と故ふ菜種御供と称を年ふりて菜花いまだ咲ざる時は梅花を挿むこと毎歳六月九日都下の人々まの本社に詣し面の門より外に出て又本社に詣しのべくとする事九度まふしを九度参りといふ其日はむつの小野に初て遷坐し給ふ日の夜七月六日は西陣に蔵ある神寶祇幣殿に出てまれ祇坐干ば此日も諸人群参しくる其間に宮司の衆僧内外の陣に煤塵を掃ひ同七日の暁天に

松梅院ニ入ル　四ツ辻ニ陣ヲ入テ清手水ヲ献シ神寶ノ中松風ノ御硯ノ入ル穀
菜坂ヲ登テ貢ル是七夕ノ和哥ヲ神詠シ給ヒシ為ニヤ又御祭禮ヨリ八月廿日ニ
行ハレテ其粧ヒ美麗厳重ヲミテヤドリ所ニ迄シ給フ其道條二十餘町ノ間地上ニ蜀紅ノ錦ヲ布供奉ノ輩ニ綾ノ袋
ヲ飄シ音樂ノ聲雲井ニヒビキ誠ニ當社ノ旧記ニ云ル如ク初雪ノ日ノ都下ノ騒人
當社ニ詣シ和哥狂詩ヲ詠シ歌ヲ献シ給ヒシ風儀ニヤ菅原氏ノ
五條殿高辻殿東坊城殿二家ノ息男十七八輩ニ及ヒシ時神前ニ詣シ幣殿ニ於テ
文章一篇ヲ撰シ自書シテ奏シ給ヒシニ後秀才ニ賞セラレ
此時右近馬場ヨリ南ノ門ニ入レテ坊城途ト云ヘリ菅神
始テ七條文子ノ宅ニ現シ給ヒシヨリ文子ノ未裔代々仁ヲ以テ稱シ神役ヲ
勤ム其婦モ亦世々文子ト名ヲヨビテ女巫ヲ松梅院御房院徳勝院ノ三家ノ社司
ヨリテ其餘目代宮司ノ奉事交々神役ヲ勤ム窪ニ洛北ノ大厦ヲ立テ　聖廟影向ノ
千載ノ星霜ヲ経ルトイヘトモ神威ノ日々ニ新ニシテ諸人常ニ間断ナシ

北野社　小野地ニアリ神ハ天満宮本殿ノ巽ノ方ニ祭ル天神地祇ヲ祭ルトイヘトモ
白右夫社　本殿ノ乾ノ方ニアリ或ハ一説ニハ勢別神主春疫ヲ攘フ霊アリ
老松社　本殿ノ坤ノ方ニアリ祭ル所ハ菅神愛松老松ノ霊ヲ八雲御抄ニ老松小野ト云ヘリ
社頭雪

後撰吟　年ふれる名ヲ老松ノ神ナレハ雪ヲモ花ト見ルヘキニヤ　雅世

朝日寺　本殿ノ西ニアリ古ヘノ遺跡ニ北沙門堂ト云ヘリ
本尊観世音立像二尺餘
煙ノ宮　朝日寺ノ南ニアリ社七座ノ内ニアリ梵灯庵心敬僧都連歌ノ志ヲ述ル小野連歌堂ニアリ
於菓ノ大事立水ノ巻臥龍ノ巻ノ二書ヲ前句秀逸ナル事菅神感應ニヨリテ手ニ授ケ給フトイヘリ

身ハいつも煙ノ名ニそ立ぬらん　心敬僧都

社頭ノ目ニ連ネ給フ小社ノ宮ノ未社ニ煙ノ宮ヲ祭リ灯ヲ点ル事ヤシロニ云
此僧都ハ鞍山住心院ノ住職ナリ

州家銘

此碑画馬殿ノ西ニアリ銘ハ堀複助書ハ烏石

銘曰

烏蹟已降入文聿興衣帛木葉亦與斯文惟顛將聖克念入神書
草蘊崇功進成山旨北雞助宜貽子孫分而爲石石可與言龍蛇
前壑毋乃生雲縢康桓纂屈正超銘寛保三年癸亥夏四月烏石
山人書立於北野廟側

菅家碑ノ南ニアリ南都ヲ向ニ丹楓ヲ奏シ給フ手向山楓樹ト詠シ給ヒシヨリ楓ヲ鐫ス標石アリ

北野天満宮
菜種御供

舩宮 本殿中門の外西側ふあり小神次社ふ曰舩宮ハ一夜の松の霊之天暦九年三月十二日菅神御託宣ふ吾棲ん所ハ一夜ゐ千本の松ゆゑ尓ゐ一夜松述懐

一夜松子世乃末薬の老木まそ本ゝゝ栄ぬ年も位を　前参議為長

去ゝ降や高雄去ま人ゝゝ一夜松　角上

連歌堂 舩宮の後ふあり毎月廿五日此所ふ於て法楽の連歌あり参詣乃人連坐ふ抱ら此句を副ことき故望者の連歌とゐて二ゝゝ正月四日ふ裏白連有あり凡て連有乃紙四枚之中古執筆乃人認ゝ行白紙遺しゝゝ記ゝ是ゝ流例とありて此白紙ふ裏白連歌ゝゝ今此堂ふ納唐天神祝安ら

繪馬堂 中門の外西の方ふあり此所ふ掲る書画詩歌連俳ハ都下及ひ遠き國々ゝゝ年毎ふ数ゝゝ多し中ふも南都北嶺の学薪の名画名筆多ゝゝ此所ふ集ゐ尓ゐ神前仏前ふ奉納ありて雑也

連句発句

あゝゝ奴名残ゝゝ多ゝゝ安満ゑ

繪の紙れ圖ハ大絵ゐ多ゝゝ此所ふ掲る書画詩歌連俳ハ都下及ひ遠き國々ゝゝ年毎ふ数ゝゝ多し中ふも南都北嶺の学薪の名画名筆多ゝゝ此所ふ集ゐ尓ゐ神前仏前ふ奉納ありて雑也

中門廻廊あるハ松枝梅枝ふむすひけく奉納し行る年代遠ふ悟りて歌ゝゝ

年々ふ掛る石燈爐乃数ゝゝ松梅の木ゝゝ多ゝゝ

聖廟奉納

乙訓ふ

梅さくや白くも濃くも大自在　移竹

無隼塔 画馬所の南ふあり菅霊中華乃経山寺ふ到ゝゝ無隼和尚ふ謂しゐ由緒ふより塔ふ名ゝゝ立体足渡唐天神乃監臨之

北野御文庫 神楽所のふふあり菅弁所ふの書巻ふ多宝塔　作文庫の南ふあり本ゝ大日如来脇士四天王

経所 神楽所のふふあり安置ゐる所普賢不動愛染聖観音共ふ霊宝ゝゝ

いつゝ乃朝日寺諸堂の本ゝゝ

竹画碑中門の東ふあり
書ハ宋 紫石
銘文筆跡共ふ土岐中書

此竹数尺耳而執杭萬仞木乗彫鐫金錯屈鐵神飛彩動不見其墨汚之處所謂公與此竹俱忘形者也君赫之画得之清人宋嶽々得之流詮々得之李用雲其法尤可喜也嗟乎稱漢画者多不辨八格十門下筆則曰合天地耳鑒者或尤其祖則其尊乃在君赫矣君赫姓宋名紫石江都人也與余善其徒副段明勤之石以建於北埜菅公祠畔蓋不朽其美也

兎欹鶺落　不暮而成　虚心貞節

寶暦癸未秋七月　銘曰

維神所亭　平安　源之駿撰
副孟義建

絶句碑 南の門おふあり頻阿法師四時ゐ句題して五言絶句五十首ゐ詠ゝ奉納を石刻ふ彫付ゝ奉ふ

祝壽碑 面乃花表の内ふあり州廬龍公美古稀乃賀章ゐ鶴文ハ略ゝ

背文萬壽無量

忌明塔 門所の南ふあり五輪石塔婆高サ八尺計おふ石乃表ふ居あり古へゝ乃服穢ゐ脱ゐ日まゐ仏塔ふ詣て神拝ゐとゝ穴を記ふ足へゝゝ

文子社 西京所供所の南ふあり初ゑ天満神七條文子ふ祢託ゐゝて其宅ふ鎮坐し祠をゐとゐむ

薬師堂 小ゑ所おゑ下の森の小東側ふあり本ゑ安ん中古真如堂東楊坊ゐふ位し事業湯を嗜む刑体の投考応あり

萬松山西雲寺 旧所西側ふあり宗旨ハ天台律ゐゝて恵心流之本ゐ阿弥陀仏ハ恵心の仏坐像ニ尺ゐ寸計開基ハ見性坊章海上人ゐゝゝ寛文五年れ草創之當寺ふ毎朝水施餓鬼ゐゝゝれハ刑罪餓死撲死ゝゝ筆ニ悪道と脱ゑ佛土ふ至ゝゝめん為の供養之開ふゝ百十餘年の今ふ至ゝて急ゐかし

獅子吼山轉法輪寺　一條の西七本松の西にあり　法土鎮西派　圖の前編に見へたり

櫻町院の御宇宮中より命ありて寶暦年中尾張國関通上人建立せしめ玉ふ

本尊の弥陀尊坐せる長一丈四尺餘り面の方に蓮華門ありて綾の障子九尺挟四尺二寸計銘文の従二位行右大辨菅原朝臣在家卿の撰みて仏寺造立の由緒を記し

往生香積界の次の方に方丈あり一條の門を桃花門とふつく一條坂桃花坊と云ふ名義より出ん

次に四天門あり南の門を照臨門と云ふ直日察風雲察の樓門の傍にあり

貝葉翻て就鳥嶺を仰く龍華れ梅開きて三衆に芳しく常行念佛の聲寂寞として木奥の音は布谷に和く松の風に伴ひ十地の座をつらぬ

云云

蜘蛛塚　七本松通一條の北西側圖の中に一丈計の塚あり古へ此所に大木多き土蜘蛛の棲しとも云ひ傳へ考あらず一名仏伏塚とも

右平記叙巻に曰く文の比源頼光癆病を渡ふに日毎に發を

久しうなりぬれば頼光ついに弊はてなんとす頼光三十余日の間枕を上ず夜の明ぬるを宵かと思ひ暮ぬるを夜かと思ひ遂に命も危く見へ給ひしかば頼光やがて心を引直し四天王の像を念じ奉り枕刀を抜て枕上に立置れたりける灯臺の下を見給へば長七尺計の法師の頭計りにて天井より下りて頼光の面を覆はんとす頼光少しも騒給はず件の刀にて頭を切給へば大きなる蜘蛛にて有けるとぞ

寶樹寺　七本松通蜘蛛塚の東にあり浄土宗西山流誓願寺に属して本尊阿弥陀佛は慈覚大師の作三尺計の立像之開基は蛟蓮社浄誉上人

大師堂　寺内にあり弘法大師自作の像二尺計天長年中疫病行し時平癒祈願の為に刻ふある高雄神護寺に安置ありと云ふ

和光院　真盛町小御所にあり真言宗なり本尊は歴代編年集成に曰西京葛野郡之名京と称くる長安と号して若狭守が町小路の東へ千本通西へ紙屋川の西二町餘を云ふ

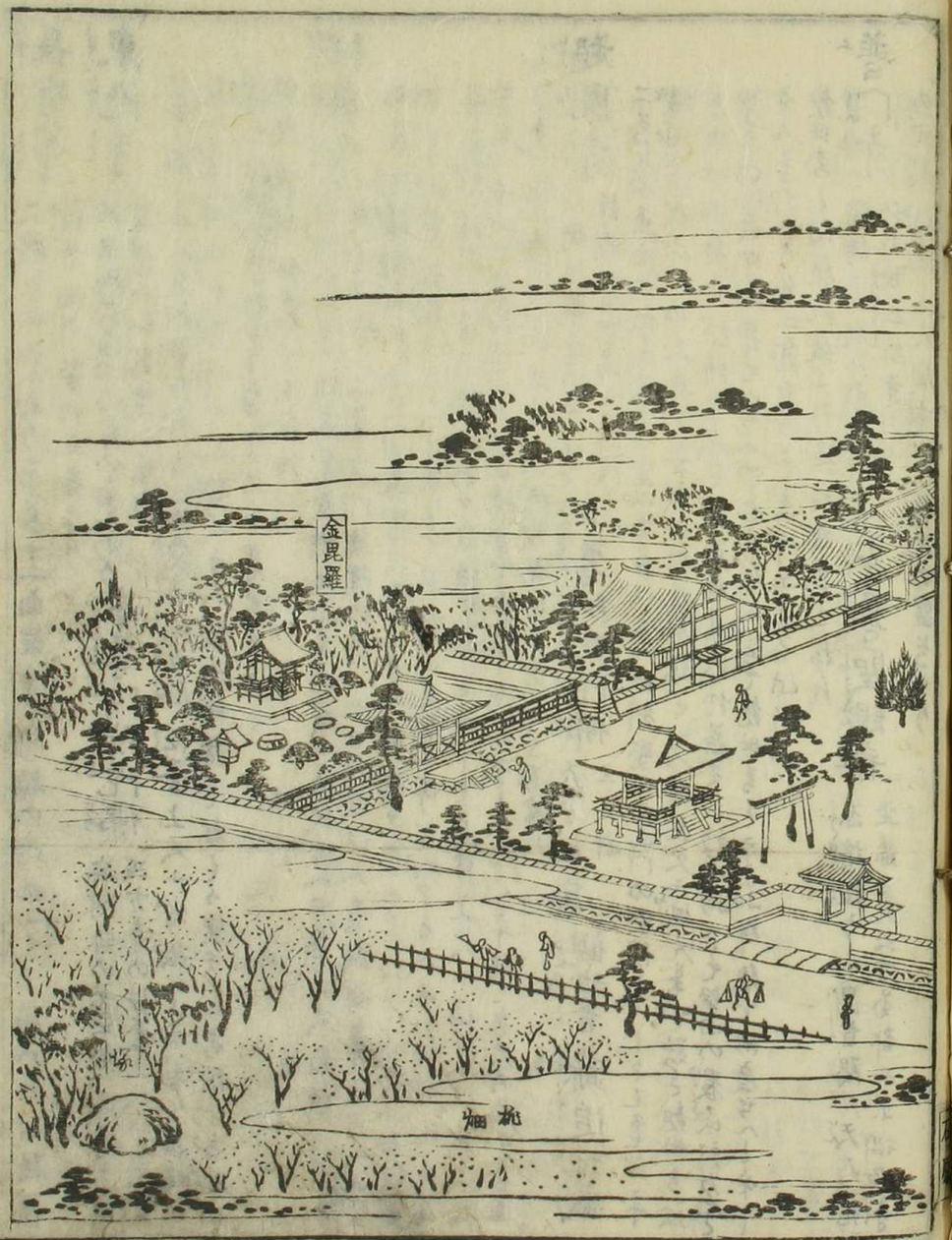
西京

西の京住人のとなへ歌

栄華　栄ゆるみもとひ萩はかふ歩行ある人や杖をもつあり　元輔

大將軍社　西京一條の西大將軍町にあり王城鎮護の為むかしは四方に社ありしよし将軍具註に曰天帝祐官を将軍と分て三十二天に行を統鬼神を領して四方を鎮護ととなへ一説中古兵乱の時京城の北方に蜀の関羽の廟を建てまつるともいふ

清和院
蜘蛛塚



長寶寺　大將軍の西にあり本尊十一面觀音八尺觀音巡禮第廿九番なり

東光寺　西京清水通下の森の南にあり本尊阿弥陀佛　安阿弥の作立像一丈二寸京極
澤士宗知恩院に屬して中興の人なり其比豊臣秀吉公の愛妾松の丸殿法誉上人に歸依し秀吉公我揚の
時必ず此寺に詣でしより中興の檀那となれり故に陣佛と称する靈像ありとぞ

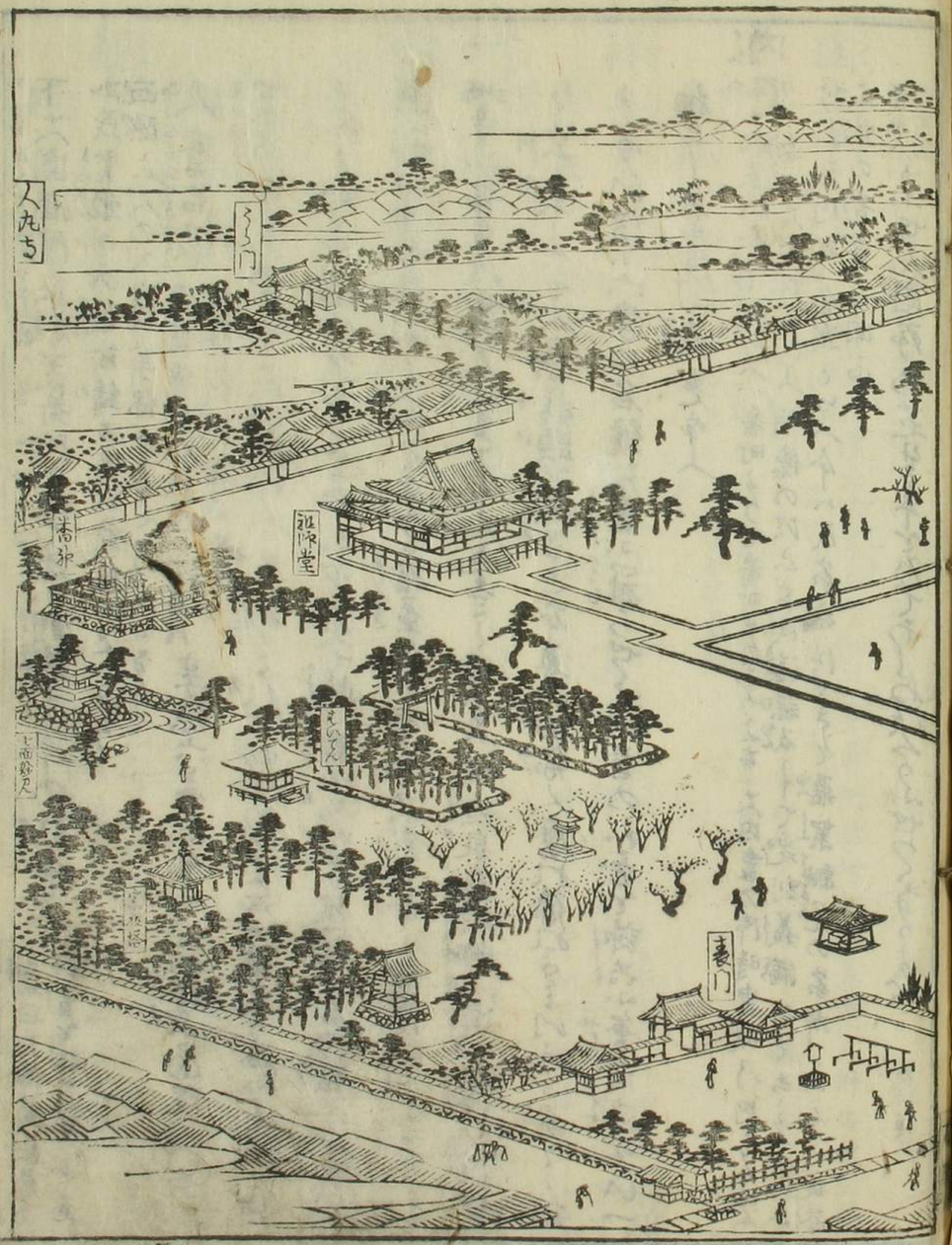
法華寺　町にあり法華宗武州池上本門寺に屬す古へ日像上人說法しゐ
所なり正和二年宗門興隆の爲一七日の說法ありしが元亀二年
織田信長公門の大衆と合戰の時蓮阿弥として人俗姿にて
衆の中に負くさ地に來て安堵せんと念じ
ゐそれより後は座に故と称し近衛殿下の家なり延寶
紀世をとは座に故と称し近衛殿下の家なり延寶

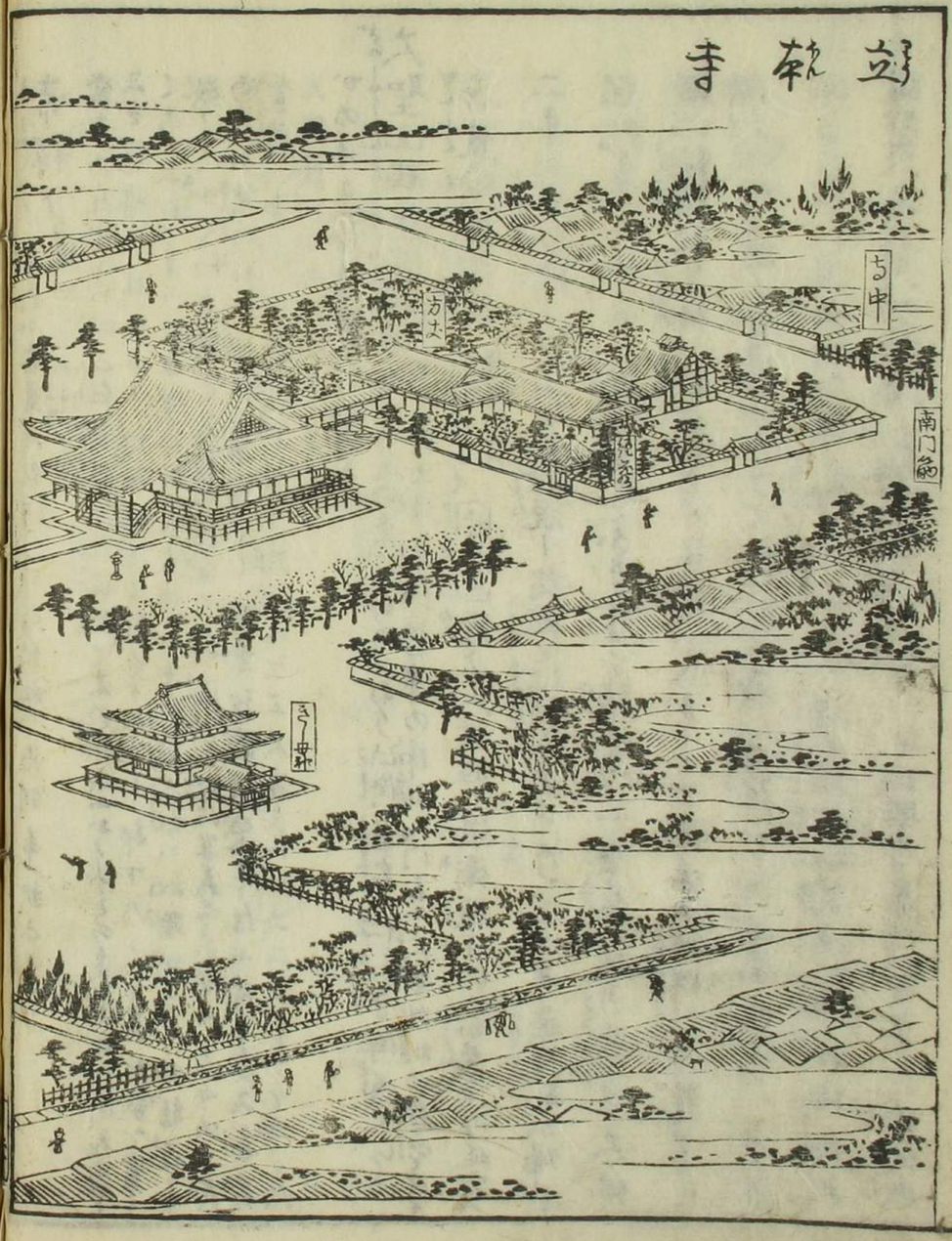
普門寺　町東側にあり禪宗　本尊聖觀音　赤栴檀にて長一尺二寸の佛
の開基鑑眞上人唐より將來の靈像なり

超圓寺　澤士宗百万遍に屬す　本尊阿弥陀佛　三尺許　恵心の作立像　觀世音　跡追地藏
二尊共に恵心の作表の方小堂に安置古へ江州堅田に門の別院ありしが元亀二年
織田信長公門の大衆と合戰の時蓮阿弥として人俗姿にて衆の中に負くさ地に來て安堵せんと念じ
ゐそれより後は座に故と称し近衛殿下の家なり延寶

帝釋天　寺内に安置す弘法大師の作初め丹州奉釈ゑみあり
後世に模して木の長六寸ばかりの像を作れり
當寺の庭中にあり映山紅躑躅紅白色の花盛
又名を錦繍乃林抔ゑし紅躑躅抔連ねてあり
てあり群來る故又映山紅躑躅抔連ねてあり
類して小なり紅白両花繁くして
あり小映山紅は両花繁くして
紫花千重乃抔抔ありと
九州薩摩日向の山谷に多し
かの地にて霧島躑躅と云ふあり

大聖山西光院　西京清水前通の東二軒町にあり　宗旨は浄土律常行念佛の道場なり　寺街道
本尊阿弥陀佛　金銅佛坐像七尺　開基西隠上人俗姓は近衛殿下の家なり延寶
二年に官祓辞して出家得脱し諸國を巡行する事凡て五ヶ年歐后郎に歸
弥陀尊祓造立し粧舎ふとかす事を頼よりて慶長の頃方廣寺大佛
殿の銅像祓木佛に改めらるゝに及んで鑪に入れし時佛像の毋指祓湯
尚元の如し諸人奇異ありて妙法院に藏む西隠上人の佛像造立乃事祓
開眼及び真毋指祓賜り即鎔範に入て鑄に忽相好圓滿の佛像成就し
延寶八年三月廿五日澤蓮院晃蓮社上人をして開眼ある者院の本尊を迎衛殿


人丸ち
ろう門
祖師堂
裏門


ち中
南門

下大圓滿院良材を寄附あつて速に創建ある今の精舍是之國の曰大佛殿釋像の所首を改て添ふ
加茂靈鑑寺の鐘銘鑄る事は前編に見へたり
西隈上人の入寂は享保九年七月九日なり
人磨石像 當院佛殿の後堂に安置ありし坐像二尺許の厨子に納めありしを此像あり石ともなし淡茶苞あるものなり其何所の人と寄寓ありしを此像あり石ともなし淡
茶もあり淡樟の色あるもあり何れも烏帽子狩衣を着して脇士の如く左右の膝を立ひざまづきて
画かけるも九のめしづくろひ捨置ん人とそ人こゝに不審をなし當院の門おとなひ
此寺に安置ありし世乃人寄よりと人九寺と呼ぶ其後冷泉爲村卿入道し法名澄覺
と名乗しより此地に閑居ありて人今に民家連綿として飛檐甍の家所々にあり
しかひ後に六字の名號板首に冠らせて六首の和哥を詠其筆跡深くひ一
一
抽そ一當院に藏免有
内野 西京のかた一番町より七番町あたりまで大内野と云ふ 大内裏の跡時皇城乃廻りを
秦氏大内野合戰として足利義滿公と北畠顯能卿と三條の者常に用ゐ
新船いかせん 四野の芝生年を經てあらはれぬ

新撰名所

九そ乃四野も雪ふ払はけて見ゆる代乃名所乃跡

國生寺 内野五番町にあり淨土宗黒谷に属す本尊阿弥陀佛立像丈六計と眞如堂に日本の
名木と云ふ聖徳太子の作と傳ふ
左子堂 門前にあり聖徳太子の寶塔ありしと云ふ
烏樞沙摩明王 左右堂脇壇に安置
祥光寺 内野六番町にあり淨土宗西山派本寺阿弥陀佛立像丈六計開基は俊鳳
和尚なり念佛の法味旦那都鄙に勸め人專修念佛の四方八道俗歩と
運ひ脱俗の聽衆群集して擔庵のごとし逆ふ寶暦年中此寺旧草創しく
常行念佛の道場といふ
竹林山福勝寺 眞言宗本尊 某佛 二軀旧本尊不動 の作と開基は覺大師の作と弘法大師
小野隨心院に属す
福聚山慈眼寺 門前七本松の東にあり禪宗曹洞尾州名護屋乃松院に属す本尊聖觀音 延鎭の作坐像丈六計
東法花寺の本尊と同木
門前時乃地蔵 作人は織田信長公の伯父
尚本額に陸奥守成正之
乃辻子にあり其旧今慈眼寺の
中又今の地にうつる 曹洞宗祖師前永平寺道元和尚常に謁京師を繁
藥の地にして沙門の居ふべき所ふあらざるを以て所ふ
觀音寺 淨土宗百万遍ふ属ス本尊阿弥陀佛 逆覺大師の作立像三尺一寸開基は方違橋
觀音堂 門前にあり本尊の孫の作立像丈七寸 上人慶長十二年の創建なり
を助く其時代考ふべし再興に報恩のため多の人勸る 疫時行し旧名重氏此親ふ所預て誦人

北野

映山紅寺

全盛の夕霧

しまれ

うりくし見

雨霧の

めぐみ小

多揚哉

眾雲

華開院　西京堀川町ニあり浄土宗　本尊阿弥陀佛　慈覚大師の作坐像にて立ち給ふ其外脇立共ニ本堂ニ安置ス本朝ニ初て仏堂ニ安置ス

當院古へ天台宗ニて開基ハ　亀山院の皇子四品兵部卿守良親王五辻宮と號ス　當院の縁起ニ依て諸国行脚ニ出家ニ給ひて法達和尚と称ス　即安居院五辻宮と寺と記ニハ謬伝ニ候

扨其後弘安十年園城寺の浄華坊證賢比丘ニ成の時天台を改て浄土ニ成ル　入吉水の流を禮阿上人と名を改る　鎮西四代の法孫ニて當院の二世ニ成ル　又

浄花院　紫雲山と号ス　元亨ニ比丘尼良経ニ身兵庫頭貞国ニ當院の本尊ニ示現ニ預ると

兄貞経ニ家督を相續し當院の檀越と成ル　着ル所の重衣ニ紙絵ニ　初ハ五辻大炊御門ニ有ル今ニ無之

西蓮寺　同町七本松の西ニあり浄華院ニ属ス　本尊阿弥陀佛　慈覚の作長一尺八寸ニて浄土宗

院町ニ有ル　其後京都今出川の北ニ移ル　大仏師康朝の後ニ定ル　是ハ真如堂當院ニ一面観音ハ菅神の御作ニ立像ニて長一尺八寸ニて金貴横次が

浄馬院　下之賈七本松の西ニ有ル浄土宗　本尊阿弥陀佛　慈覚の作長一尺八寸ニて浄土宗

観音堂　寺内ニあり本ハ十一面観音ニ念持佛ニて洛陽観音巡の第九番ニ

出世稲荷社　千本通下立賈の南二町ニあり山城初ハ内藤氏　公卿之亭保年中ニ勅ニて社頭再建ニ出世の号有ニ

稲荷荒神社　大仏の北平安城同郷ニ　荒神ハ菅神ニ御坐ニて居成ニ

明神同社ニあり　稲荷ハ荒神ニ　荒神ハ稲荷ニ

立宝寺と号ス　山桜通出水の南ニあり　本尊阿弥陀佛

順興寺　九条町通堀川の西ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

坂九九丸と号ス父蓮如上人ニ　本願寺顕如上人と大坂石山合戦の時當寺ニ

八十一歳ニ時出逢ありて　剃髪ありて　法名ニ

斤破名號　天正年中織田信長と本願寺と軍乱ニて　名号ニ

梅雨井　下長者町ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

人家田中氏の井ニ有ル仲夏入梅の節霖雨降續ニ梅雨晴ニ

七日計の間此井より清水湧出ル　是ニ依て名ニ

松林寺　智恵光院通出水の南ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

立像二尺計　開基ハ清和上人天正年中の草創之由寺ニ

坂ニ此茶方坂ニ有ル寄附ニ

時折ニ誓ありて一説ニハ清和上人の意ニ

ふ効験ありて世の人やとてとていふ

茶の名ニ有ル

稲荷荒神社　智恵光院通出水の南ニあり　本願寺

明神同社ニあり　稲荷ハ荒神ニ　荒神ハ稲荷ニ

立宝寺と号ス　山桜通出水の南ニあり　本願寺

順興寺　九条町通堀川の西ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

坂九九丸と号ス父蓮如上人ニ　本願寺顕如上人と大坂石山合戦の時當寺ニ

八十一歳ニ時出逢ありて　剃髪ありて　法名ニ

斤破名號　天正年中織田信長と本願寺と軍乱ニて　名号ニ

松林寺　智恵光院通出水の南ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

立像二尺計　開基ハ清和上人天正年中の草創之由寺ニ

坂ニ此茶方坂ニ有ル寄附ニ

時折ニ誓ありて一説ニハ清和上人の意ニ

ふ効験ありて世の人やとてとていふ

茶の名ニ有ル

七日計の間此井より清水湧出ル　是ニ依て名ニ

梅雨井　下長者町ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

人家田中氏の井ニ有ル仲夏入梅の節霖雨降續ニ梅雨晴ニ

須ク明石名所圖會ニ見ヘたり

たぐひなき

松林寺　智恵光院通出水の南ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

立像二尺計　開基ハ清和上人天正年中の草創之由寺ニ

坂ニ此茶方坂ニ有ル寄附ニ

時折ニ誓ありて一説ニハ清和上人の意ニ

ふ効験ありて世の人やとてとていふ

茶の名ニ有ル

梅雨井　下長者町ニあり浄土宗黒谷ニ属ス本願寺の院家之初ハ河内ニ

人家田中氏の井ニ有ル仲夏入梅の節霖雨降續ニ梅雨晴ニ

七日計の間此井より清水湧出ル　是ニ依て名ニ

出井幹坂越ニ流ヲ汲ニて年ヲ経て昇ニて雨

あれを俗ニ空梅雨ニて其歳ニ水洋溢ニ成ル常の如シ

大學寮舊趾

拾芥抄曰二條の南三條坊門の北壬生の西坊城の東にあり二水記曰應仁の亂後寥々として聞へず永正年中に至つてまたその廟殿せり基趾神泉苑の西北薬園の中にありと云 又按旧蹟今の神泉苑町の西にして南北二町に亘て東西一町の間この地年久しく荒廢して寛永年中酒井侯 拝領して候第となる或が曰其地ますそ大学寮と銘を彫る石の手洗鉢ありしと云 其後紛國へ移しぬ今猶一日一箇の古井あり弘法大師掘らしめ給ふ獨鈷水といふ今かの邸にあり

土橋稲荷社

二條通堀川の東鍛冶金義が宅にあり初めは小鍛冶宗近が家にありて金義が祖千壽院治法より宗近にかけて社を造るよしを土橋の号は中頃二條堀川の橋を土橋といひて 御城追手御門筋にあり其かたはらの社なればかく称すとぞ

滋野井

拾芥抄曰中御門の北西洞院の西滋野貞主卿の家とあり今按下立賣小川の西に清名あり是いふ所の滋野井なるらん

二條殿家

旧趾鳥丸通二條の北二條関白良實公又福光園殿下と号は 二條殿町にあり
名月れけるの日記に云六月廿日頃にしあれたるところ名をそ挽び給ひしとそ二条の家に御座ありあなかしの夜さらに夢いおいせし御中暑ものをさくるの心ぐへれと面白しきんめしに高き松山あり森よりつきいづるのおもしろ松乃枝にかゝれる披きえてれと涼しき乃人に二階被他とりけさきべ坐の中をあかれり石間乃水さおる袖ぬれこらんなり流るゝ乃音の流れをくみ入はじく清くのたえを涼ひいとおかし給し西乃二傍の山披隴く又尺とくの朧落より勝のよ人に花くりけるる二階のさ傍かど山里めきておもしろきと云

和泉井

鳥丸通中立賣にあり此清名紅藍乃花被絞りて繒帛被染むに紅色他方に勝まされど高貴の調進多し是名泉の其といひ洗ひし總て臙脂を染るは水の清潔によりて其色をおかしくはも花洛名産の最一なるべし

少將井

烏丸通夷川の北人家にあり平安舊圖に大炊御門の南東洞院の西に簡喬親王乃家少將井とあり 清少納言枕草紙云井はかね井 櫻井 后町の井 千貫の井

少將井天王社

車屋町通夷川の北東側會所家乃奥にありかね井御旅町といひしは 高辻大政所町に往に天正年中より四條京極今の御旅所にうつせり 祚此地は京極御靈八所の生土之地なれども祇園會七日より十四日まで祭義を行ふ

菊邦百首
祇園の御神は素盞鳥みそ御もまん玉乃御輿は稲田姫とお將井とか八王子人やうり是れ大己貴命なり此社さらにかくおもしまん又お將井をへむかしおね井乃尾役拾きのこいひし祈禱ありをの家九園み井ありなをかの井げさのさんへう神輿被さん参りしより世俗にかの王子乃みこし被おね井とへやすり是を二百餘年もくりされみ天下にあまねく祇園會をやまれて祇園會の附王子乃みこし一社少將井の上へあげまゐるとと云

伊勢御家

東洞院二條の南歌人伊勢の家ありとそ 舊趾詳ならず
後頼髄脳云 能因法師攝津前司兼房が車の尻に乗てゆくに二条と東洞院とのかどにて伊勢が家にそありける今その日の松乃ありけるをさしたを結びておりてた傍かに洗きそ誠に此人さまかか松にそちりけるにそありしが末の見へ車よし車の尻よりまろびおりて下るかる兼房あやしきを問われは能因云この松の木は功名の伊勢がむきびて松にふるにやいかてか車に乗ながらに過ぎ侍らんやといひてそうちおゆきそ松の見ゆるかぎりは車にものらざりきと語り 袋冊紙同之

古今 家をうりてよめる 伊勢
あすかゞはふちにもあらぬ家宿もせにかはりゆく物にそありける

新古今 仝
山櫻ちりてみ雪にまがひなばいづれか花と春にとはなん

祇園會鉾の児へ其町々の
當家より志るひ出し上同敬日
本社へ糸詣するの嚴重なし
して启輿に駕し先き歩徒
後丁従者多く鄭を正し其
行粧威風凛々として宛高貴
の往来の如し足るん
神の威徳れいち
志るしるべし

志だらくへ
雲のうへへ
鉾の児

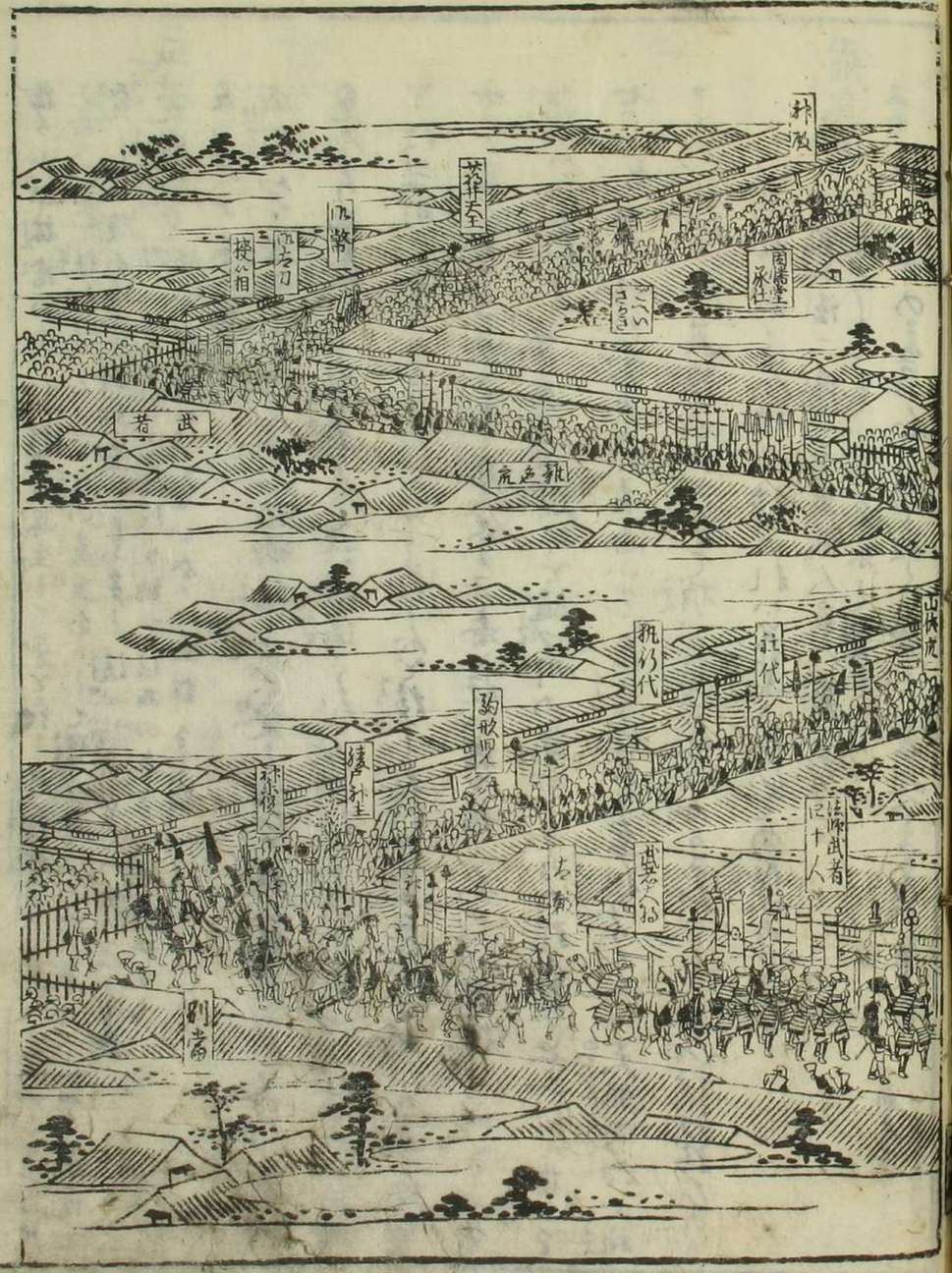
瑞雲山通玄寺　曇華院　東洞院二條ふあり地名板新町と称す　高倉宮以仁親王の殿舎と申傳ふ　足利左兵衛督直義殿舘跡とぞふるき人ふ侍り　曇華院初ハ近衛ふあり　寛正六年山城ふうとを季瓊日録ふ見へ　女院より代々姫宮尼公ふ伝持職し給ふ　尼寺ふ改ふ　本尊観世音　毎年十一月廿五日諸人の番詣板ゆるし申ス　三銘鐘　一鐘ふ云寺の銘あり　延福寺云云　干時延文丙申初冬下旬五日　妙覚寺銘曰平安城高辻大宮法華堂名妙覚寺云云　干時應永第八暦辛巳閏正月日　金龍寺銘曰長亨二年戊申季春廿日従一位富子誌之　金龍寺云云　一説ふハ此鐘高妙尾上の寺ふ有しとぞ　一説ふハ此鐘ハ往古延福寺銘ふ曰撫津國福原庄兵庫經嶋石寺名延ありしとも銘ふよりその證ふハなりかたし　一説ふハ往古鐘ハ寶庫ふ藏ありしとも此鐘ハ此寺ふ出ス　不動堂　姉小路東洞院の東ふあり　延命院と号ス本尊不動ふハ俗ふ教大師の作ふ傳ふ　業平卿家　高倉通三條坊門の南西側ふあり　今舊趾とて水軒くぼを　風雅集　あるじなくなりて久しくなりぬる家平卿の　とてよめりとぞ　前大僧正範憲

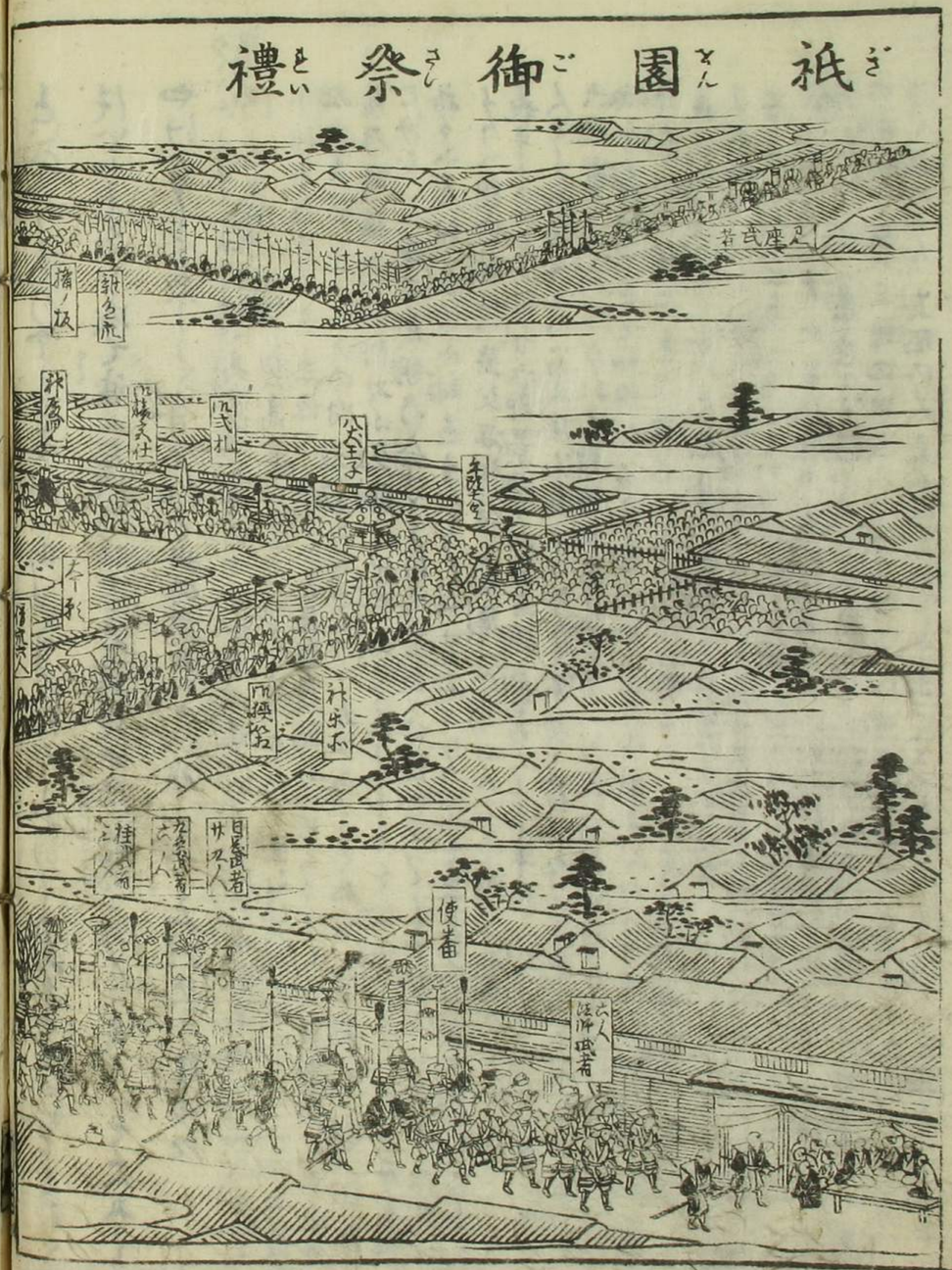
吾こへてもおもはぬ名もおもひ出ぬ　長明無名抄ふ

業平の中將が家ハ三條の坊門よりハ南高倉よりハ西ふたゝずまひ　さはがしからぬ所ふて　常ふも似ずもの　さびしくらしくおぼえ侍ふ

もいのそらのみやまもあり　ほいらもあく成て城ふ古代の所と見へ　やけとをしく有々と　悪源太義平旧蹟　高倉通三條の北西側南の端ふあり　東西二間計南北一間餘の空地之　初ハ高倉乃方ふ所属ありし　近年塚を圍む　所謂々区ふ分明ふ　平治物語の大意　悪源太義朝の一男ふて忠胤義賢の人古今無双の勇將之十三才の時　攝列安陪助ふ生擒ら　諸乃時　安陪助ふ生擒ら　平清盛慈悲ふて　こけど其後父義朝乃命とハいへ　平治物語ふ義朝長田ふ誅ら　ふ義平ふ親の敵清盛父子ふ討て　義平ふ家系ふ仕ふ六郎景澄と云　人とし二條烏丸の家ふ居し　六波羅へ所人ハ　ら　房ふ生捕ら　義平の霊雷とあらわれて　恩を蒙り誅ら　経房ふ生捕ら　義平の霊雷とあらわれて　経房を蹴殺ら　の玉接此物語板案ら　高倉ハ其時の　高倉ハ二町西之大内裏の所時ハ町條度々焼て今の　○天明四年の春此地乃支配を蒙る人ふの方れ隣家を仕空地ふ　○天明四年の春此地乃支配を蒙る人ふの方れ隣家を仕空地ふ　の樹あり根ハ二條の地ふも　なく枯ふ　六月ふ至ッて家建る事　遅して止ふ

祇園御祭禮





終に此株檜の本七月頃より再生して芽を発し枝葉繁茂し花は春の如く咲て九月
に至て実を結びぬ人々現在の奇異なりとて驚嘆せずといふ事なし世にめづらしき事と
發されし験あり其例和漢ともに多し後世識者の考あるべからず

成範卿家

桜町中納言と号す少納言信西の息男小督局の父也 姉小路室町と云々 今旧址詳ならず

長門本平家物語云

成範卿を桜町と申る事はかの卿桜を殊に愛し給ひて姉小路室町の宿所に惣門乃
見入より西東の町を並て並木の桜を植通されたりければ遠近人異名に此町
をば桜町とぞ申ける又云さくら花に心を移し花の陰にて守て明されしかば
中納言しもやるせなく春を惜び桜を待し人なれば桜待中納言とも申
詔に下されたる　源平盛衰記云　此町を樋口町の桜町と申たり殊に執し花をしみ
七日に散ぬる事を惜しまれけん春毎に泰山府君を祭られたる人　天照御神に祈
申されければ其験にや三七日まで梢に名残をとゞめられけるとぞいひつたへける

ちはやぶるあら人神乃神されは花もよはひをのびにけるかな

飛鳥井

万里小路二条の南東側人家の裏にあり　濫觴ありて古へより名水と賞す

風雅

あすか井の影乃心へ志らねども影ねへき花の陰乃哉　前斎院 為実

拾遺愚草

いりて水坂我らふりけてむすびし其飛鳥井の影ぞたえける　定家

三條右大臣家

定方卿之拾芥抄云二條坊門の北万里小路の西と云云

二条右大臣家乃屏風に

後撰

春立て子日のあすはしらねどもけふの人の野辺にまさらん　貫之

法泉寺

万里小路押小路の南虎石町東側にあり東本願寺に属す本尊阿弥陀仏は慈覚大師の作之縁起云計原は天台宗封境方一町にして善法院角之坊と号し親鸞聖人の舎弟尋有僧都の住職しそ所舎兄聖人東より上洛の後時々此所に来りて大衆易行の法流を弘めたまふ所也満齢九十歳の時遷化も此地なり故に聖人旧跡の一なりと後聖人滅後今宗とす本願寺伝記に曰禅房は長安馮翊の邊押小路の南万里小路の東と云

法泉井

當寺の庭中にあり往昔親鸞聖人止住の時此井を堀しむるに水底に石ありこれを引揚るに形虎の臥に似たる故に聖人銘して虎石と名づく今東大谷祖廟の上にあり茶編に委し町號此石より起る寺號此井より起る

願樂寺

旧町西側にあり東本願寺に属す初めは江州矢橋にありて道場たりし本尊阿弥陀仏開基は佐々木家の支族首地左衛門尉頼方法躰し正願と号し蓮如上人の弟子となる

三天儀

又天文に精し當寺の什宝之享保年中檀越に佐々木源慶安といふ人あり天文の渾儀を練達し本朝天文の大儀を造る景坂測天左旋右旋乃運光坂形にあらはして渾天儀を本朝に移し三天儀と号す慶安没後遺言によりて祖佐々木枝義の本像を之に寄附す是願樂寺の祖と同姓の由縁なり毎年冬至の日三天儀を出し天文の講説し諸人に見せしむ慶安述作の書本朝天文志十巻あり世に行はる

空也堂
踊念佛

かゝ
鉦も
空也の
痩も
[illegible]
[illegible]

定家卿家　二條の小路室町の西ゟ東へ入北側ニあり
拾芥抄ニ　為氏卿　號二條家ト号シ為相卿號冷泉家ト号ス云々
宿うゝそ都の内もさいれたる庭乃風情
定家ぬし
忘れしを宿にむめうつしうへおきて
風雅
のみかうき捨てねくる梅の本乃枝ふかくつけゝる
永福門院内侍

法華堂　草庵
京極入道中納言ハあれ共ゟ南むきふ今も二本杉ハ有ゟ
白山社　白山通押小路の南ふあり　内裏ふ強訴の事ありてそのまゝあらしハ神輿ニ墓振て此所ふ捨
亜ゟ歟ゟの例ふ效ふてそれ故神輿振とて即　動ありたる物語しゝなり
當町筋上白山通二條の小ふあり
布袋藥師　拾芥抄ニ白山通二條の小ふあり本尊ハ聖徳太子の化坐像九寸五分實ハ普
賢菩薩の垂跡ニて古へハ大松原宮田御廣願ふあり　桓武帝の字形を以造ゟ給ふ今ハ二本杉ハ有ゟ
紫式部家　京極正親町の南ゟ東へ入道しゝ所ふあり　南京極の西頬今ハ
常盤井　拾芥抄ニ北ハ四条南ハ六条ニて大炊御門ゟ京極ゟ西ニ常盤井ゟ云々
名寄　名ゟ月もやとかはんも秋ハ盤井の水ふ宿ゟ月ゟかげ
後鳥羽院　やそ我なそうゟ常盤井の水ふ宿ゟ月ゟかげ
少將内侍

天滿宮　北側ふあり
菅家　高辻殿乃御鎮守ゟ
攝政九條殿下尚實公の御筆ゟ
奉先の額　當社の門ふ掲ゟ
遣迎院　京極通中御霊乃北ふあり宗旨ハ四宗兼學ニて廬ゟ寺ニ属ゟ
ゟ四面の本寺ゟ人圓ゟ共ゟ安阿弥の作ゟ
本尊二尊佛　釋迦弥陀共ゟ立像三尺計遷座の号ふ称ゟ
雲水井　客殿乃巽ふあり　井ゟ
光了山本禪寺　京極通石茶師町ふあり　十二年ふ當寺板蓮立ニ同廿六年五月廿一日入寂ゟ八十一歳
其内ふあり　計日蓮上人の念持佛　初ハ江刕ふ樣乃立像釋迦佛　金銅長一尺計日蓮
後世ゟ安ゟ
安禪寺　同街石茶師町の南ふあり　二十年寺の一覧ゟて旧地ハ四條堀川ゟ
神明社　尊像之脇壇左不空羂索観音右不動尊共ゟ弘法大師彫刻ゟ隨身の
梶井天滿宮　京極中御霊の東　梶井御門跡乃御境内ふ
初ハふの方御門おの側ふありしゟ遷座ゟ
權帥ふ貶任ゟ時天台の座主法性坊尊意多年御交ゟ
ゟ北叡ゟ登ゟて御遺賜ふ御涙をとゞめさせ給ふ人ゟ所ゟ
ゟ姿ゟ墨ゟ流ゟ色ゟ万緒の御心ゟ

られし畫像に加の硯を取そへかくく僧正へ傳へ御硯ハ梶井御門跡の寶庫に傳ゆ御神像ハ御境内の社に藏す 世に菅家の御神像多くまとゝいへとも當社乃尊親にて希代にして賞せらんハあるべからず

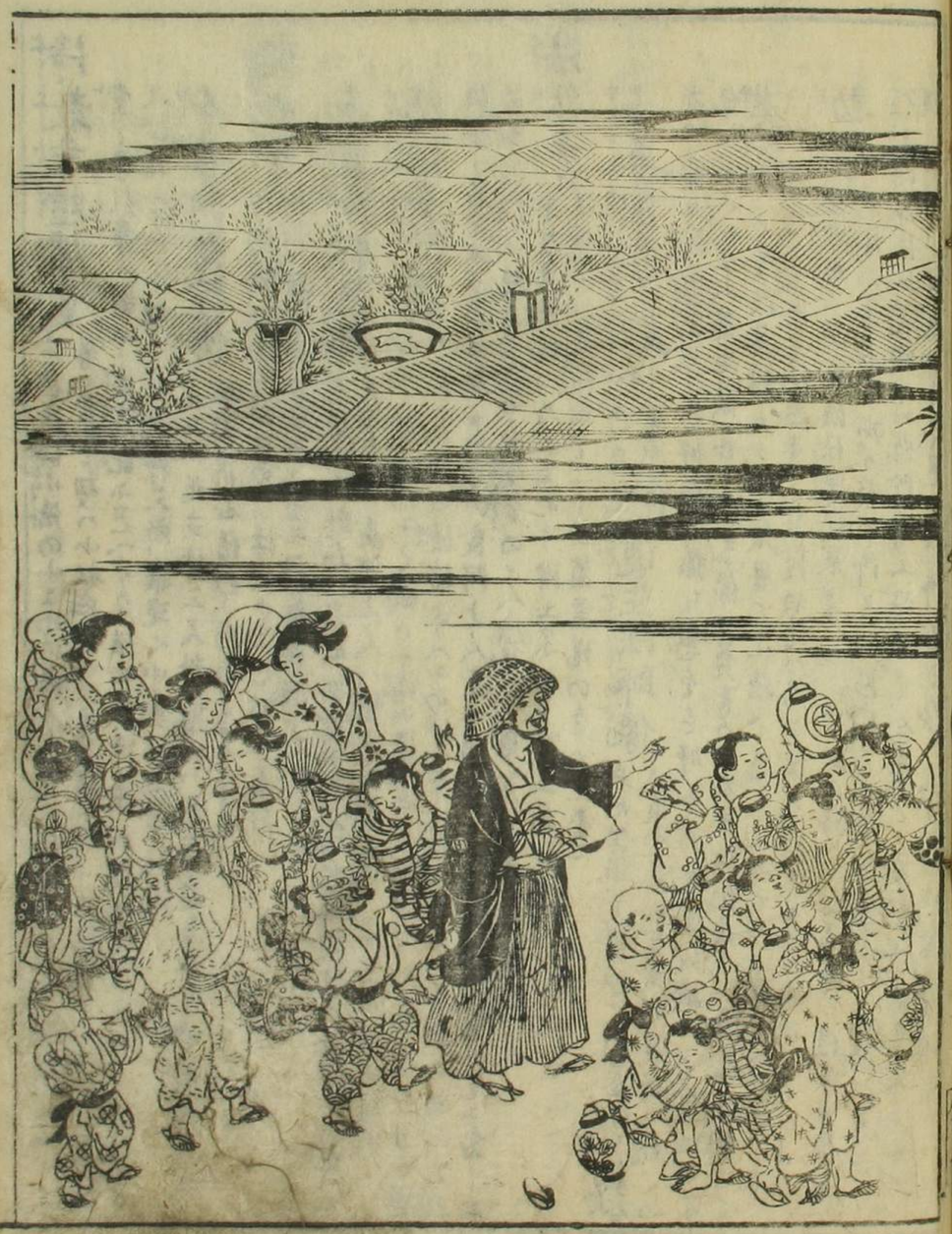
見性寺 二條川東にあり浄土宗知恩院に属ハ本尊阿弥陀佛 恵心の作 初ハ京極下御霊の後にあり宝永年中ゆゑあるを本願ハ至膳正重勝ハ織田信長公乃鹿子にして村井春長軒に答ゆゑ或時直指人身見性成佛といふ八字の旗を賜ひ旗所とする天正十年六月二日明智乱の時織田公并に春長軒戦死あり依之此寺故建立しこく件の旗故土中に埋て見性寺とあらく同十六年六月當ちに於て七回忌追善の時豊臣左閣參領しまひ十七石の寺領を寄附せらるゝ膳正法名見性軒の墓當寺にあり其子孫原田村井乃兩氏且越さり

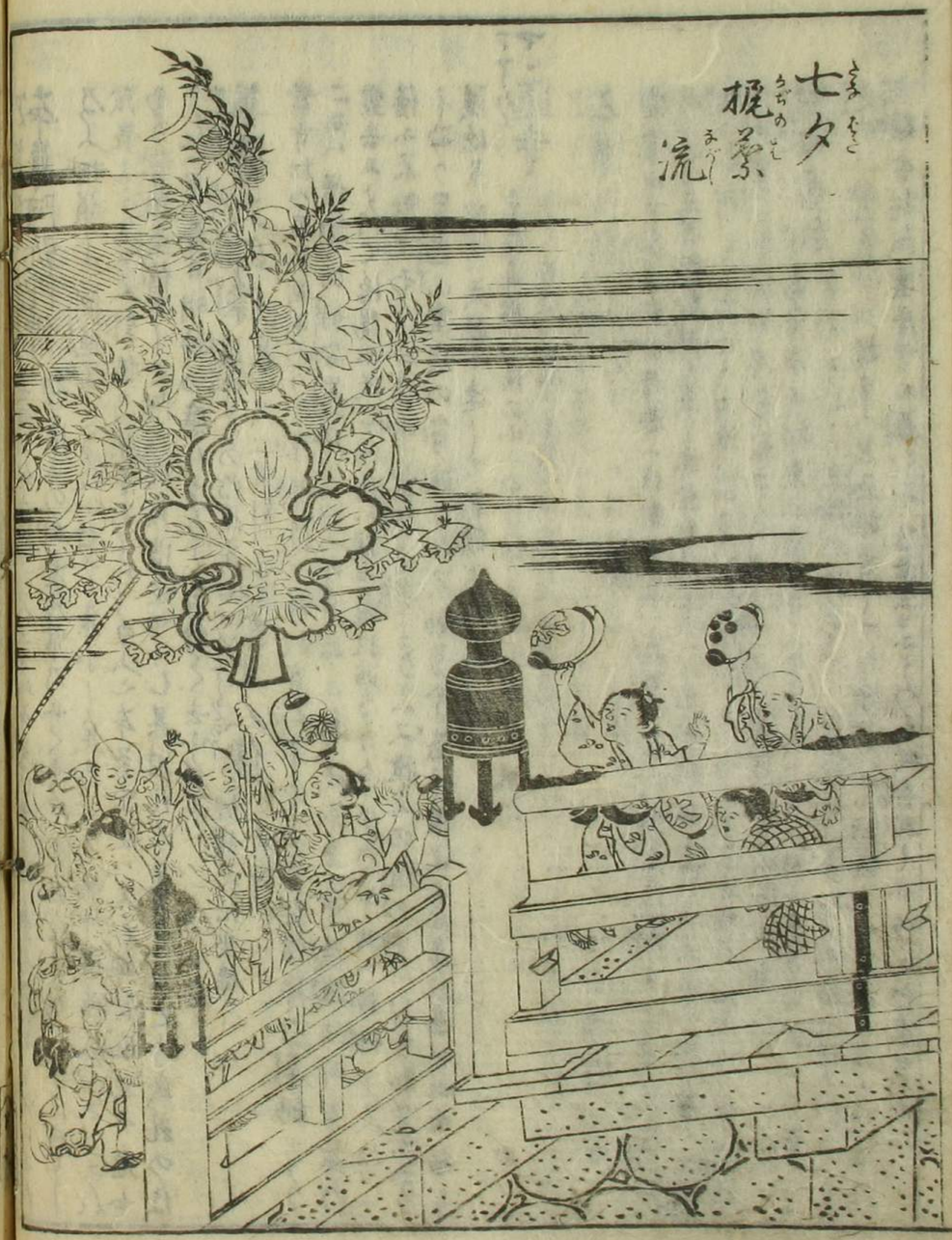
三福寺 二條川東にあり浄土宗誓願寺に属ハ本尊阿弥陀佛 定朝乃作 初ハ京極二條にあり開基了観漸空上人 坐像二尺餘 夢見地藏 寺内に安置ハ定朝の作立像三尺又寸後一條院の后上東門院夢中に生身の地藏ゆゑの示現を蒙て其御像を作らしめまゐる像也 前大納言為世三福寺にて聽聞の次に書讀作る時述懐

新載 名故なけし頭をあらそれはまゝとりしすかれ御浪 示證上人

聞名寺 二條川東ニあり時宗相州藤澤ニ属ス大炊道場と云ふ本尊阿弥陀佛一ヲ安阿弥の作立像二尺計光孝天皇塔ヲ内ニあり
秋野道場 寺内ニあり古へハ南都又ハ天台宗ニて改て時宗となる
法鏡山妙傳寺 旧所東の端ニあり法華宗一致派開基ハ日意上人初ハ眞言の学徒なり改宗して甲州身延山ニて當寺を建立せり初の地ハ西洞院綾小路今の姉小路町ニあり其後京極二條又ハ京興聖寺ニあり當寺の六世日恵上人靈夢ニ依て
日蓮上人像 坐像二尺初ハ上京栗ヲ志て又安置ス
大恩寺 旧所ニあり法華宗本尊阿弥陀佛 旧作立像二尺八寸四十八願巡の身光二重ノ
百万遍ニ属ス 開基ハ窓遵社称誉上人
教安寺 旧所ニあり旧宗本尊阿弥陀佛 旧作立像二尺八寸四十八願巡の身光二重ノ
知恩院ニ属ス 開基ハ発公天阿上人
空中山寂光寺 旧所ニあり法華宗勝劣派開基久遠院日圓上人初ハ室町通湯ヲ
其後京極二条ニ移シ又今ノ地ニ遷ス
信行寺 旧所ニあり法華宗本尊阿弥陀佛 定朝の作立像二尺八寸計方除本ハ四十八
知恩院ニ属ス 願巡の身一番之開基預誉準公上人
要法寺 旧所南の端ニあり法華宗勝劣派初ハ醒井綾小路ニあり今要法寺町ニ移ル
其後京極二條ニ移シ近年ニ今ノ地ニ遷ス 開基ハ日尊上人ニて初ハ天台宗
ありて智文ヲ遵ノ末ニ依て初ハ眞言ヲ学ビ後ニて即法義ニ改ム 脇佛ハ観音ヲ一百夜祈ヲ示現ヲ蒙ヲ日目法師ニ
梵字三十六箇寺あり康永四年五月八日ニ化ヲ八十一歳
安養寺 京極四条坊門の南ニあり法華宗西ノ派 一書ニ安養寺ハ二書ニ
四十八願巡の身四十六番之 源脩筆跡の扁額

本尊阿弥陀佛 去日の作立像六尺三寸此本尊の蓮葉ハ薬ノ蓮葉ヲ倒ニあり
乃ち相議して倒蓮となるにあらず
故表して女人引接乃相をあらわせり
あり誓願至信ありて阿弥陀故造立せり
ことに足者日明神の應化ありと告給ふ
善導大師像 漢土よりの傳来之作 法然上人像 観鏡乃作坐像
長一尺二寸計
當寺初ハ大和國ありて華墓院と号ス寛和年中ニ恵心僧都乃草創なり
二世ハ僧都の嫡安養尼と云ふ寺号ニ起る天永年中隆暹法師本尊乃
霊告ニより洛陽ニ迁ヲ旧地ハ堀口通れ西ノ方今宗乃中興ハ證佛上人初ハ
傳ふ不動堂あり今乃華墓檀乃半ノ上ニ建ル 脇佛ハ聖徳太子乃作
しより足畠山重忠の寄進ありて不動ヲ今ニ乃檀上ニ安置ス 開山ハ大原
後徐草院の天聽ニ達して勅額ヲ給ル
蓮寺 京極通錦小路の小ニあり浄土宗百万遍ニ属ス
四十八願巡の身四十五番之今宗の祖衆誉月心上人ニ
本尊阿弥陀佛 丈六 坐像一尺八寸 共ニ恵心僧都の作
當寺ニ在る面貌相好僧都一代制作の内ニ最も亦僧都乃
面ニ二十五菩薩ヲ画く是も亦僧都乃作ニ
猿ツ久所ニ存せり内陣の四ヲ
天井等ニふ僧都乃當作なり
地藏堂 寺内ニあり定朝乃作坐像二尺霊験
鬼女舎利 當寺ニ在る初東山雲居寺ニありし時迫ヲの醜女本尊ヲ拝ヲ
来るそれより業障乃深キヲ悲しミ至信自ラ来ヲ
見ル人佛舎利ヲ授ケ鬼ヲ変じて信楽昌んニ相續し八十歳ニ至て往生ニ
末期舎利ヲ雲居寺ニ藏む本ヲ當寺ニふるヲ以舎利ヲ亦ヲふ伝来せり




七夕
梶葉
流

淨教寺燈爐堂

京極通綾小路の小エあり淨土宗知恩院ニ属ス四十八願巡の第四十二番之當寺初メハ小松内府重盛公建立ニて洛東ニあり宝物ニ盛公自筆の書記ニ添へ置ル事ハ源平盛衰記ニ委ク記ス之ニ依テ爰ニ略ス又此地ニ鎮守ハ熊野三所權現之中興ハ立誉上人

本尊阿弥陀佛

丈六日の作立像ニ画圖ハ恵心僧都乃筆ニて淨土宗一心院ニ属ス

聖光寺

旧街後小路の南ニあり淨土宗一心院ニ属ス四十八願巡乃第四十二番之開基良阿上人

本尊阿弥陀佛

立像三尺計初ハ丹波国栗田郡篠村八幡宮乃佛本地佛之天正年中良阿上人八幡宮の霊夢を蒙りて五安置ス

清海曼陀羅

むかし蓮の翁ニ随ふ清水寺の記ス所の清海上人ニあらず一霊異之後世奇都の繪師高天法眼ニ命ジ曼陀羅を圖法眼法門ニ依聽受し安心決定のうへ別の清海法眼の家ニ伝ふる所ニて良阿上人丈日明神ニ請しのち法眼の宅ニ宿しぬ

法然寺

京極五條坊門乃小エあり淨土宗知恩院ニ属ス法然上人御蹟巡礼二十五箇霊場の第十九番之

本尊圓光大師像

作自他坐像一尺三寸計蓮生法師

坐像三尺計

入道ある時旧里ニ到り無谷ニ趣くの折ふし安居院聖覚弧して師のこゝろ像ニ似ざる像ニ恨をいだくの由を聞て師乃深志ニ感じて自作の本像を與ふると東國ニ化益し一寺を建立しとく成歴て上洛し法下ニ於て又一寺を建立しとく旧地ニ移ス湯小路東洞院之

勅額

極楽殿と書ス後伏見院宸筆ニ中央ニ掲ル正安年中

空也寺

同街五條坊門の南ニあり淨土宗知恩院ニ属ス四十八願巡の第四十一番之當寺乃草創之地極楽院空也堂と号ス

本尊阿弥陀佛

立像三尺余寸旧地ニ錦小路西洞院乃西ニあり天正十九年ニ今ノ宗の祖見誉上人

空也上人像

自作立像二尺余寸

無願寺

空也寺の南ニあり淨土宗一心院ニ属ス四十八願巡の第四十番開基幻誉上人

徳正寺

富小路通四條の南ニあり東本願寺ニ属ス二條烏丸通四條の南ニあり門城淨土宗

本尊阿弥陀佛

安阿弥の作立像二尺余寸霊告ありて此寺ニ遷営の時今の地ニ移ス

寺説ニ曰文明三年二月十六日厭と乃本願寺親鸞聖人の廟塔ニ破却せし先立ニ寄ニ遁ニ井寺乃別院ニ遷ニ井上ニ旧前ニ立ニ寺乃藤髪して預知ニ身命を捨強ニ故ニ此ニ建ニ蓮如上人ニ威牀を繍ニ其文ニ曰

今度本願寺依破滅ニ山頭之悪黨等開山上人之遺骨欲ニ堀返所願如依ニ一身之才覚全御番仕不ニ移轉条一世之満足末代之名譽神妙也為ニ褒美ニ内木佛令ニ授與ニ候也難ニ有存ニ子々孫々迄御廟所之御番可ニ仕者也

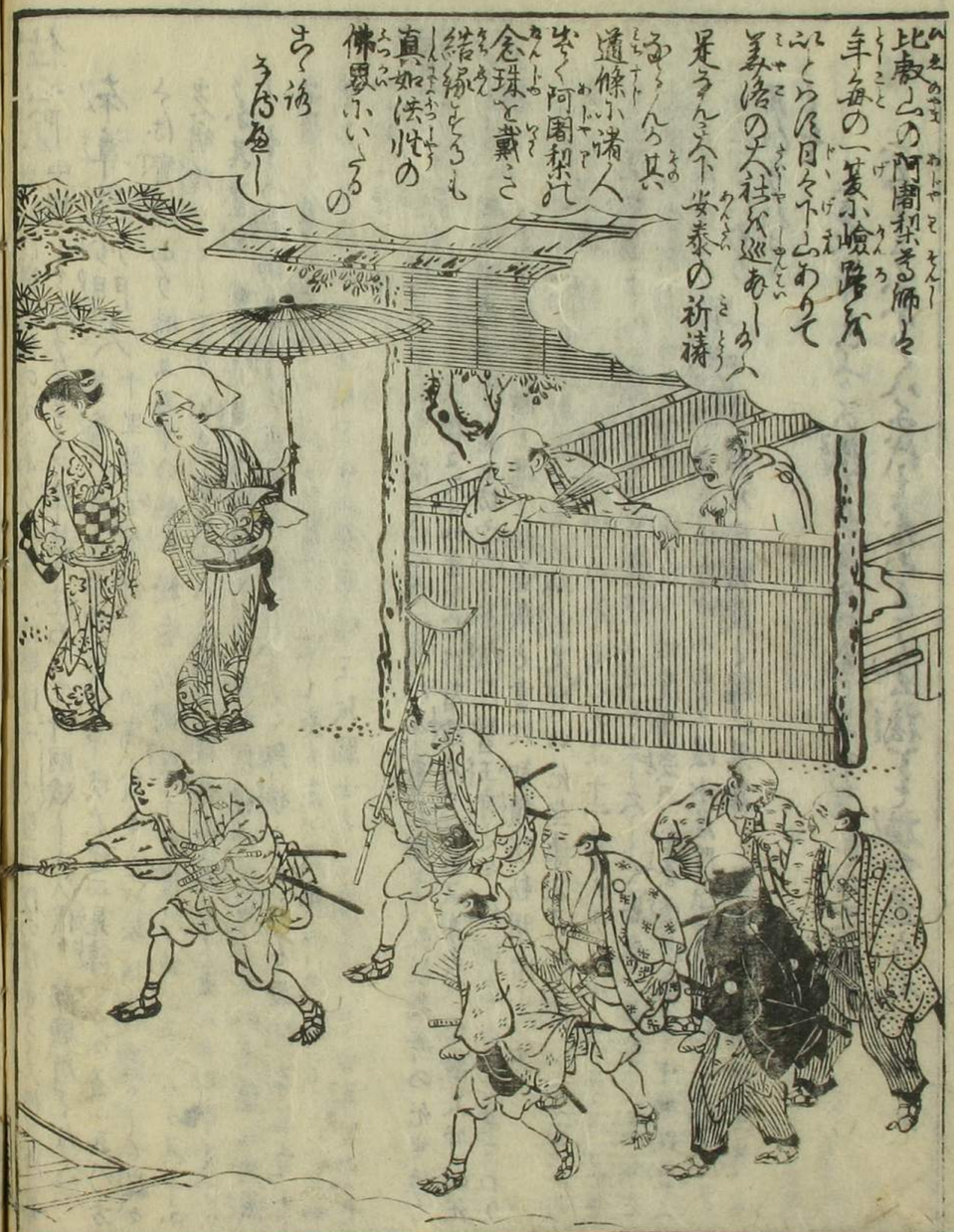
文明八年正月十八日　蓮如在判

勝久井　當寺の堂前にあり細川兵部少輔勝久の
　茅宅乃旧趾にて其井水之
當寺乃什物ある親書聖人の筆十字名号（後西院の宸翰六字九字乃名號　親鸞聖人
蓮如上人の遺骨　秀吉公朝鮮發向乃單誌あり。又毎年彼岸の初夜より平七帝
入道真佛上人の傳記
講讀に

南岩藏石不動　松原通數屋町の角にあり真言宗高野山明王院惣持所と
　本尊不動明王の石像弘法大師の作と
寺記云當院初は法相宗にて朱雀五年に道觀大徳の草
創なり其比は比叡松梢森々として其中に一堆の丘山あり平安城鎮護の
の後弘法大師此石佛を祈請して安置し給ふと云傳ふ又云ふ人皇五十代桓武帝
為四方の經王を石藏に収らるゝ所也其一負みにて南岩藏と称ふ
其後天暦年中鴨川濫水の時堂舎も没流し荒廃に及ひしを
乃僧苔延　勅許うけて再興をそなへ寛和年中聚樂城造営に奇石数多く
廢し石像も塵芥の中にあり天正年中聚樂城造営に奇石数多く
は冬らるゝを石將として其時
の有所後く尭祝旅ちて城中に聚樂城造営に奇石数多く
後は小堂を営てそに安置に靈験古今人家建續て殊詳あり次
鐵輪塚　堀町通松原の南にあり傳云昔蛾姫佛ねあり神に祈て毎夜毎の時着をあた
　氣疫てそに死を其霊祝条として今人家の裏にあり是其旧趾ありと世人
大江公資家　東洞院通五條の小東側人家の裏にあり是其旧趾ありと世人
　傳て源某が將乃家ありと〳〵町の名も今源某町と云
袋物紙を往因に古曽部より毎年花盛に上洛して大江公資が五條東洞院の家に
宿をせ件の家の南庭に櫻樹あり其花盛に祝賀人為と云
御射山諏訪社　東洞院通六角乃南側射山町人家の裏にあり信州諏訪明神を勧請を
　鎮坐乃年記詳あらず依毎歳七月廿七日祭式を修行

住心院　東洞院通三條の南にあり名字僧驗通にて聖護院の住家なる大僧正覺寿
　中興にそれより堂上の華族入院ありて法嗣職しるひ代々勅願所〳〵
本尊毘沙門天　運慶乃作之像四尺八寸中頃大僧正晃譲一夕の夢に西乃方
　さほ寶閣あり時に百千の蜈蚣精舎を圍繞し守護乃神ふたゝひ其中に
光明煌々〳〵て多門天現まします大僧正隨喜敬礼して養さめ奇異なる
ふ其翌日妙法院堯恕法親王より金剛院僧正に命じて此像附属
しまつる諏訪社遠〳〵く拝領して初を摸別本の寺に
安置し尊天告命ふけく當院ふ遷〳〵奉ら尤ふ酉佛師乃作にして如
来右ふ弘法大師の作にそまつる人愛除明王祝脇士として近年
に祈ふ諸人絶に
鼠突不動尊　六角堂の西ふ隣る住心院ふ属ふ本尊不動ふ弘法大師の作坐像三
　尺六寸照権ふ大日如来を安に智證大師の作又春天ハ傳教大師の作
大師堂　松原烏丸西ふあり本尊ふ弘法大師の作坐像三尺六寸照権ふ大日如来を安に智證大師の作
　て堂後面向ふ額を掲る松室藏と号に近年堂宇建立あり
弘法大師像　真言新義の宗祖興教大師の作坐像三尺餘舊仏なる像ふ紀列
　一条ふ根来寺の本尊と書に智積院動明僧正の筆と
中性院性盛上人ふ霊告ありて當院ふ安置〳〵天明え
年今の堂内ふうつと又真言新義中性院傳受乃ふ松室道具當寺中興性盛上
人より傳来して客殿ふ安置〳〵天正十一年兵火の附かの寺乃宇頗
今ふ至ふ傳来して其名の入りとるの上ふ至て祝ふとする
いみ〳〵ふるく〳〵ふ代を莅ある事と玉椎や垂久ん　湘夕

阿闍梨の
笠や
風薫



比叡山の阿闍梨等師を
年毎の一箋に嶮路を
ことらに日々下山ありて
美洛の大社を巡ぶしかに
是なんこ天下安泰の祈禱
なるんか其
道條に諸人
出く阿闍梨の
念珠を戴き
結縁するも
真如法性の
佛界にいたるの
さて語
うけ通し

和歌所　皇太后宮大夫俊成卿五條室町乃旧舘放鳥治の比ふも薨明卿俗領しゐて新撰
集所撰しゐひし之今の玉津嶋社俊成卿社ふ具殿内ふ之ふ之
拾芥抄曰

新拾遺集　撰者為明　勅撰之事治定貞治二年二月十一日内々被仰武家事
同十五日和哥所五條室町自武家以行忠三品被送綸旨於撰者云云
新玉津嶋社ふ北村季吟翁六年のあひた社記ふ自筆ふ書のへ今社家ふあり
具文ふ曰　大ま入道殿乃家ハ五條室町のひつるゝ徽書記のゐ拾ふもつてさとれた
五条三位とやせし成り具そこふ彼卿こそ仕社城社ひけるのゆりし風俗
へしふ尭憲乃深秘抄ふハ等持院殿霊夢ふよりて仕俊成卿の屋地ふ勅諚
しゐひし経賢法印を別當職ふ補せしゐしゐをかる之権大僧都覚尋
我ゐそのゝ二代ふ仕ふくゐ玉津嶋ゐひ
麻苑院殿御作ゐし
つまも之代人しみもそ駅路
さきれ等持院殿。寶筐院殿。鹿苑院殿。頓阿。経賢。覚尋。公私共ゐ二代ふくゐいふくゐそい
る此説ハそこゐゐ後成卿乃社ひ是ゐつるふ仕明再興せしゐ行ゐるくしゐ具ゆへ貞
治六年三月廿三日新玉津嶋のお会ゐくあるしゐふ作ゐ石衛門督為遠卿
ゐ撰ゐ宮居ふそふあひれてゐりもそひゐ玉津嶋姫
後永権中納言為邦卿
今そ我ゐりハゐる玉津嶋ふそむしのえゐれも
同記のまゐ季吟翁曰古抄をそびとりて源氏物語ふ具ゐふ土佐日記の抄と伊勢物語の拾穂抄ハ寛文
八代集抄ハ仁ふ具ゐふ土佐日記の抄と伊勢物語の拾穂抄ハ寛文
乃そゐめつゐと渡水尾院の帝ふ春覧ふそふ之ふ仕ゐ
二ことせとりふや多葉集の拾穂抄ハ延宝の
同記ふ季吟翁六十路の時玉津嶋社ふ侍しゐふいそれありし

拙りそそよ六そしの老の波玉津嶋ゐふ舟そよ夜ふ在　季吟

社説云俳諧の宗匠芭蕉翁ハ伊賀上野城主の家士松尾甚七郎ゐ次男ふして後家の門人とりて季吟翁ふ就ゐ
嗜ふよりて後水尾院の帝ふ春覧ふそふ之ふ仕ゐ
新玉津嶋ふ往来しゐ竟ふ季吟翁乃芳子ととりて歌道を伝授しゐ時々
桃青と名ふ俳諧を初ゐ具後宿坂辞して江府ふ赴ゐ
元禄女社　高辻通室町の西ふ側人家の奥ふあり古へ此地ふそん女乃塚あり今ふ祠
ふ営ゐ鳥居を之額半女社と書ゐ仕地ふ在ゐもくあり初ハ画工
狩野氏の宅地之則今ふおゐて江戸狩野栄川の持地ふを
宇治拾遺云
長門前司とゐふ人の女あり高辻室町ゐ
妻戸口ふそ常々人ふあひあふとゐふ所ふ
ゐひしてふふるをゐ乃妻戸口ふそやゐそ
てゐ名部ふ人ゐくゐぬさそ例のさゐふ
しくゐさいさゐあたりのゐしくてあ
りりそそあんやゐそ人々走帰てのやゐ
ゐりふこふこの妻戸口ふなのゐふそあ伏
ゐりふふこふ入てふ夜ふ入ふ之ふ之ふ
戸口ふぬゐたりいとゐほゐたりふとんぜ

さちらから
いわせく
だうり
魂まつり
加賀
ノ女代

六歳念佛ハ毎歳七月
十五日ニ在郷とりおのく
組を立て都の町々ニ
出盂蘭盆會魂家の
馳走ニ家々の不をニ
より行ひける
近年ハおどけ
狂言ハ御ゞへて
衆人の目を悦ゞ
むるも三佛無の周と
なる役りなるべんね

さるくゆくへき方あくて呂てふあんとおうをうさうふやうそ素もを亜をく
んとそて妻戸口の板布をそだらそおろさんとくれどそてのろくふれろされと
もふそうふ堪てたのくと掻つきそなうとうの高辻とうふ北室町とうふ西をる辻面ふ
六七間計り程ふ小家もあくてをの塚和とうふ社
板をおくんいそひをんてあおうさ乃ふもいまふあるとなん

山王社 室町五條坊門山王町ふあり総持院と号ふ古へ祇園の別院みて僧数九所
坂本ふ王ふ有宮ふ乃日吉所とう七社の神供かをく調へて歳おふ恐てつくる○
まが天台座主の 御所へ捧けをる仕加持あり てそれより坂本の本社へ弊を
ふし玄未の神供と坂ふ古へとうの早尾社 日所ふあり糸神猪田彦命弘治
流例みて今ふ怠慢ふし 年中ふ霊告ありて青面金剛於
安ふ世ふ庚申社と称ふ迫年安永のま
住を普門 僧都 当社於再営ふ

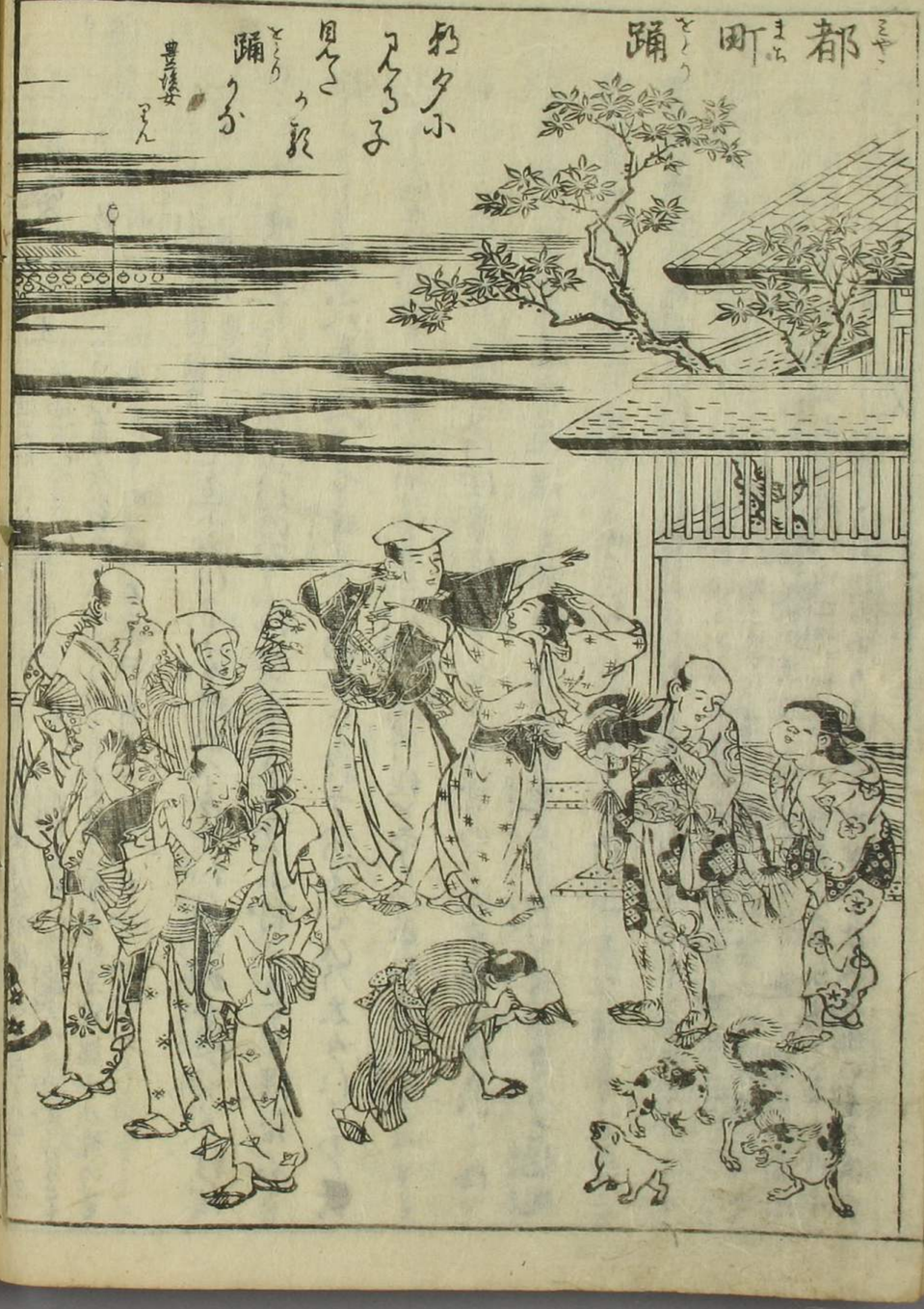
午頭天王社 高九通高辻の小大政所町大善院の内ふあり古へ祇園の神旅所とう
新町通六角の南人家の奥ふあり故ふ名と次
肉柱水 弦と香気あり故ふ名と次 淳和帝の神験みて
亀龍院 錦小路新町の西ふあり真言宗随心院ふ属ふ初ハ
弘法大師のふとふ所之擲木の銘ふ曰天長六年酉八月建立とゑ元今ハ
到つ九百五十餘年回禄の災をし 日出愛染明王と書ふ仏殿の軒ふ掛
市中ふ於ていまそ仏祖を願ふ **額** 九條関白尚實公の御筆とり

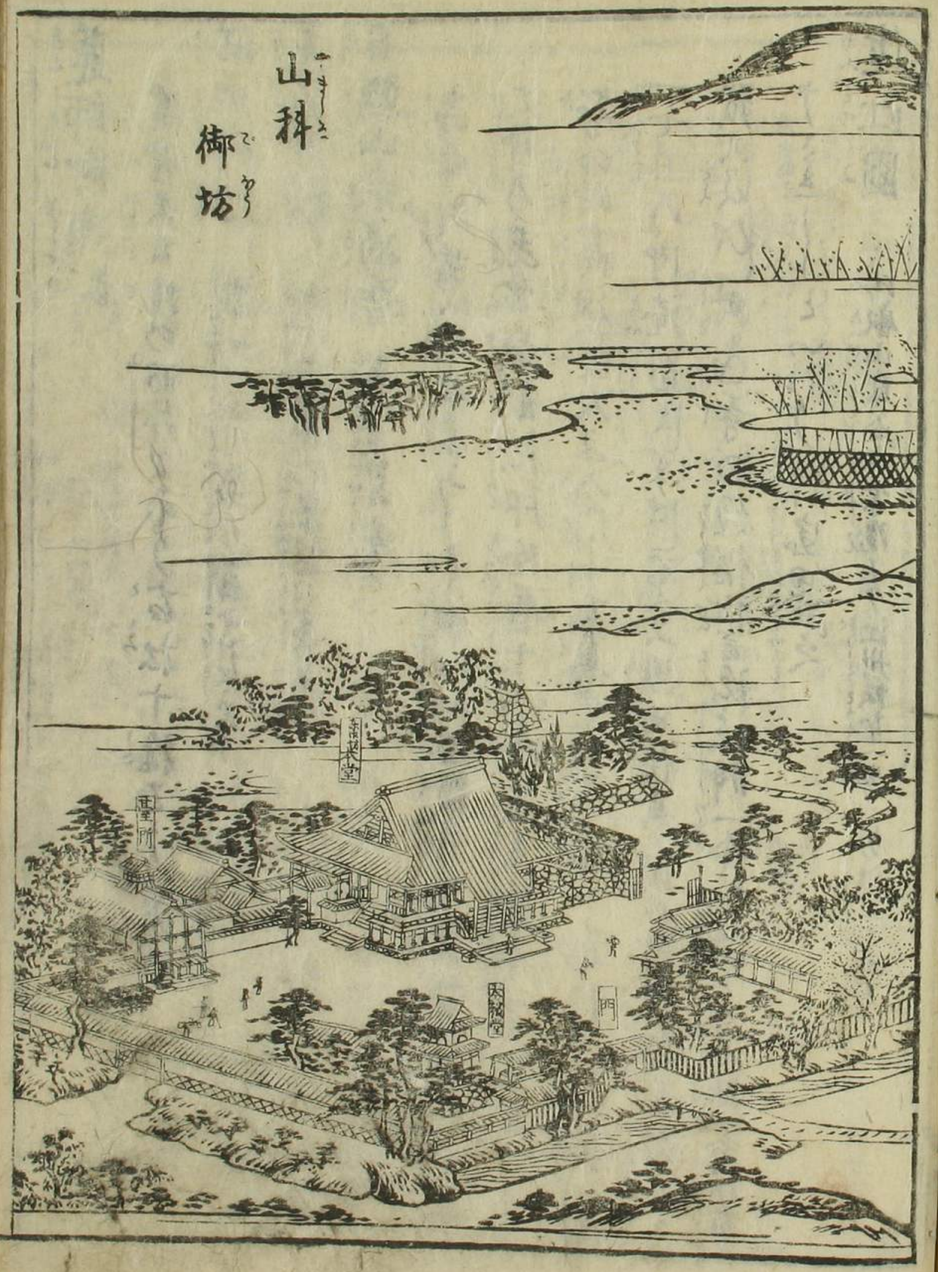
本尊愛染明王 弘法大師の仏 坐像一尺六寸計 **亀薬師** 寺内ふ安ふ五尺金剛佛一尺六寸計 亀甲ふ立七
道祖神社 新町通松原の角人家の裏ふあり今首途神と称とそ
宇治拾遺曰
道命阿闍梨 傳大納言 道綱の子 とそ色ふうけるとき
めくくく読るそれのおの式於のかりふゆ
ふしてよろろ程ふ八巻をみそそ暁みそろ程ふとうふ目さをくく経於仏を
誰そと問ふれいおのまふ女条西洞院ふ示れ翁ふ端帝経を守ひ給ふ事生々世々を
をれてくれと云ふれ道命曰法華経於よ
そくとふれふ女条の道祖の曰清くて読まて
世ふ多於へ公翁ふ迫給まつりて御ふ
諸天も聴聞ひふ陳於翁ふて御ふひとくふ
平将門社 新町通の西四条の南高辻子ふあり天慶二年俵藤太を秀卿等将門と滅し
頸を仏所ふ梟しこと後世仏地ふ宮於建まつ崇ふあり故ふ神ふ祝ひて神田明神
と崇む其於空也上人ふ六斎て空也供養の道場こゝふ勧請そ骨辻
子と地名ふ呼ふ空也上人将門の亡霊於供告し石於建くれしふ今
高サ二尺計の瓜乃ちくれうふ石社内ふあり
の下ふ厭まとりとあん

都町踊

朝夕に
見る子
見えて
か歌
踊
かな

豊媛女
ほん





飛梅 西洞院高辻乃小菅大光社おこあり圖ハ前編に見へたり拾芥抄云
天神御所高辻の北。西洞院の東洞院面と云云
菅家文章曰
東京宣風坊有一家家之坤維有一廊廊之南極有一局局之開方纔
一丈餘投歩者進退傍行容身者超居側席先是秀才進士出自此局
者首尾畧計近百人故學者目此局爲龍門又号山陰亭以在小山之
西也戸前近側有一株梅東去數歩有數竿竹毎至花時毎當風便可
以優暢情性可以長養精神余爲秀才之始家君下教曰此局名處也
鑽仰之間爲汝宿廬余即便移簾席以整之運書籍以安之嗟虚地勢
狹隘也。本朝文粹日書齊記贈大相國云云

誕生水 同社東の方頃の内にあり **誕浴井鉛**
誕浴之水再見澄清汲焉不竭注焉奚盈法律取象不槩自平鳴乎神
德永仰其明　明和二年乙酉　東都烏石葛辰書元篆額

大泉寺 五條の小西洞院月見町にあり 本尊阿弥陀佛 惠心の舍弟寛中供奉の作
浄土宗知恩院に属す　立像三尺五寸計
當寺の中興は賢公上人二世賢親上人住職しまゝ時寛永七年二月十四日の夜
又在る生極楽の委有故靈告ありて其曉天に異香薫し天華降々り是より花陰
如来と称じ号故花陰山と呼ぶ又如来右の袖故
脱せられ衆生引接の相を殘しぬれば汗袖如来とも称せ
親鸞聖人花園舊跡 此地の邊は原九條殿下兼實公の別館にして花園亭
と号す親鸞聖人六十二歳の時東國より上洛し
ゆゑ此亭の傍に止住し葭を編て垣とし草庵故営ミまゝ此人葭牆御坊と
ふづく常陸國小條平左衛門此地にて聖人の教化故受て無野山へ系統の本
聖人傳記に見へたり其後此所を花園院と号し
真佛上人に附属しまゝ本佛光寺經詞傳にあり

蓮師御廟跡

芝村大きなの西外にあり古松十株ばかり是也

西流御坊

西本願寺御門跡御掛所山科西野村にあり

東流御坊

東本願寺御門跡御掛所日ノ岡にあり

日耀山永福寺

東流市田村にあり

當寺往昔は天台宗にして叡山西谷微妙院兼帯の所也傳教大師乃真弟敬観法印延暦十八年建立後年実閑法印寺務の時高祖聖人に入門して真宗の佛場となり又蓮如聖人も一七日の御滞留ましましける又織田信長大坂の御本坊を攻て合戦に及びし時當寺の住侶抗言坊法師一命を抛て大坂へ御加勢すゝみしといへり什宝畧之

近江國

比叡山南谷大乘院より江州坂本へ出る細径二十五丁

とぞ申しきと云り　後に罪障懺悔の為に般若一部六百巻をみづから書きて奉納したる今に彼寺にありと云

或書云源氏物語は児女子の口にも唱ふるものなれど文学ましくやさしくいふ詞の元ぐるし文章は孔孟の教にあらず其の心は和漢女の人にして是が右に出るものなし儒学史漢の機荘老の教ぐうりに云ふ所をあげて云がたし其は佛書を天台一心三観の血脈をつぐ又日本紀をよくこそ見たりけれとて日本紀の局とも云つりてい又石山にて経典の裏に須ゞあらしの書よりかきはじめるとは式部が心のうちにも紙縫の人いつはりにやありけんと独笑せられし所の桐壺より決貫に云下しるとみるべし又は河海の説を信じ彼自筆の大般若は知らくて石山にわきおもいる坊に遁蔵して其のすを可の撰も作りしがはやくも空云ふゝ作りきと云云　後世代々にいたりて源氏の抄を著せし其の書数たくさ卅品斗　其中にも伊行卿の奥入を始め定家卿逍遥院中院の張江入楚にて其は全き紙に詳かなる

◎

紫式部石塔

紫式部は閑院左大臣冬嗣公の末裔越後守為時が女也始め藤式部と号す宣孝に嫁す中宮上東門院に宮仕しよりの名なり　彰子の後二位倫子の女房なり又後に左衛門佐宣孝の妻となる長保三年宣孝卒去の後紫式部と号す又系図に御堂関白道長公の妾といへるは誤なり妄説也此の事旧記に見えたり日記の文と見えても知がたし

○

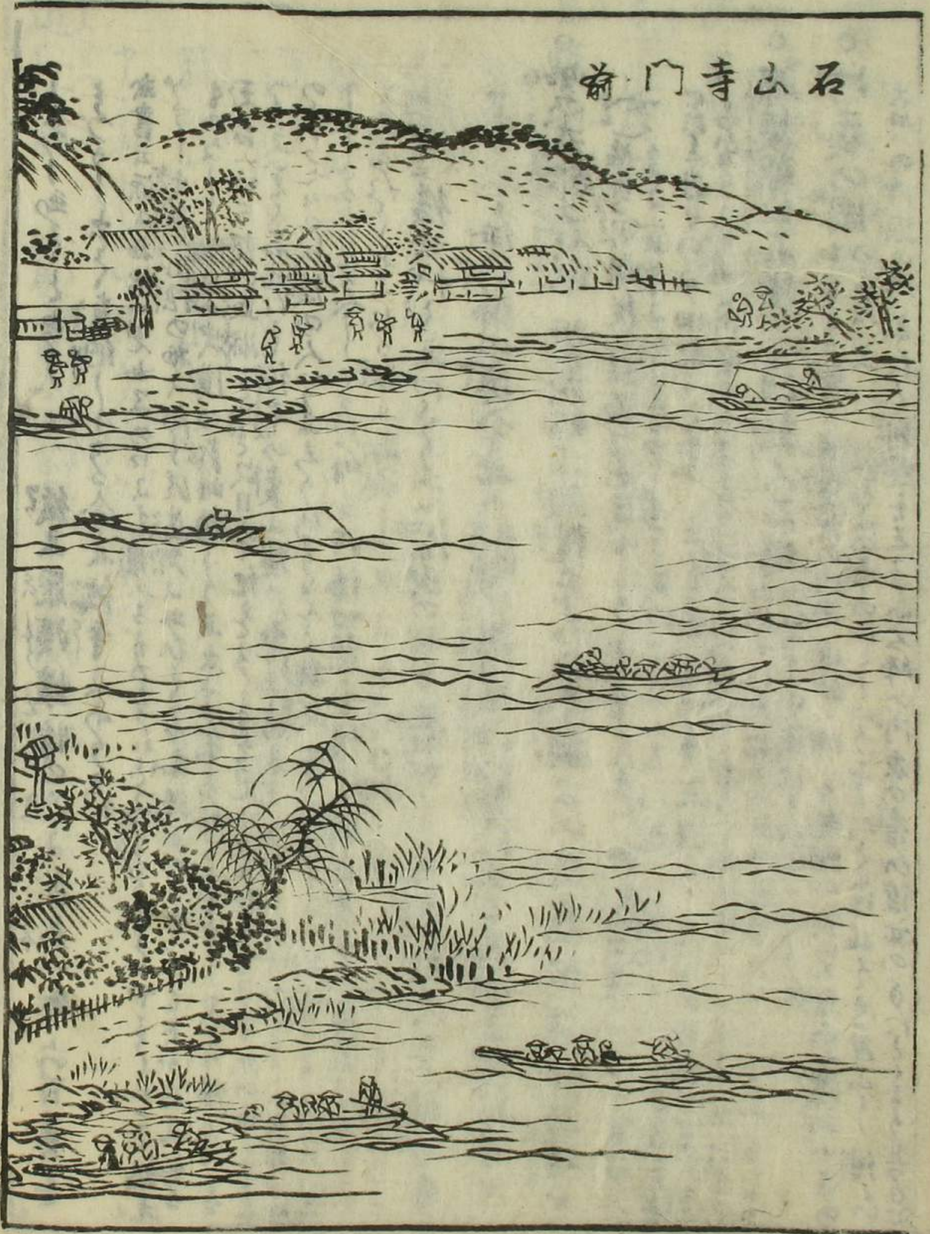
源頼朝公石塔

○同乳人石塔　右傍に源頼朝公の乳母亀谷禅尼といふ人の墓なりとぞ

○

片履の図

石山寺より輪番院の内供淳祐が師なる醍醐の観賢僧正之淳祐少年の時延喜の帝のみことのりにて観賢大師の御廟を開く此時淳祐を召て具せらる大師の御衣の香ひ淳祐の手にとゞまりて其のまゝ



それより烈を全して三條東へ行くなる御旅所
あ所あるゆへ又旅乃名あり

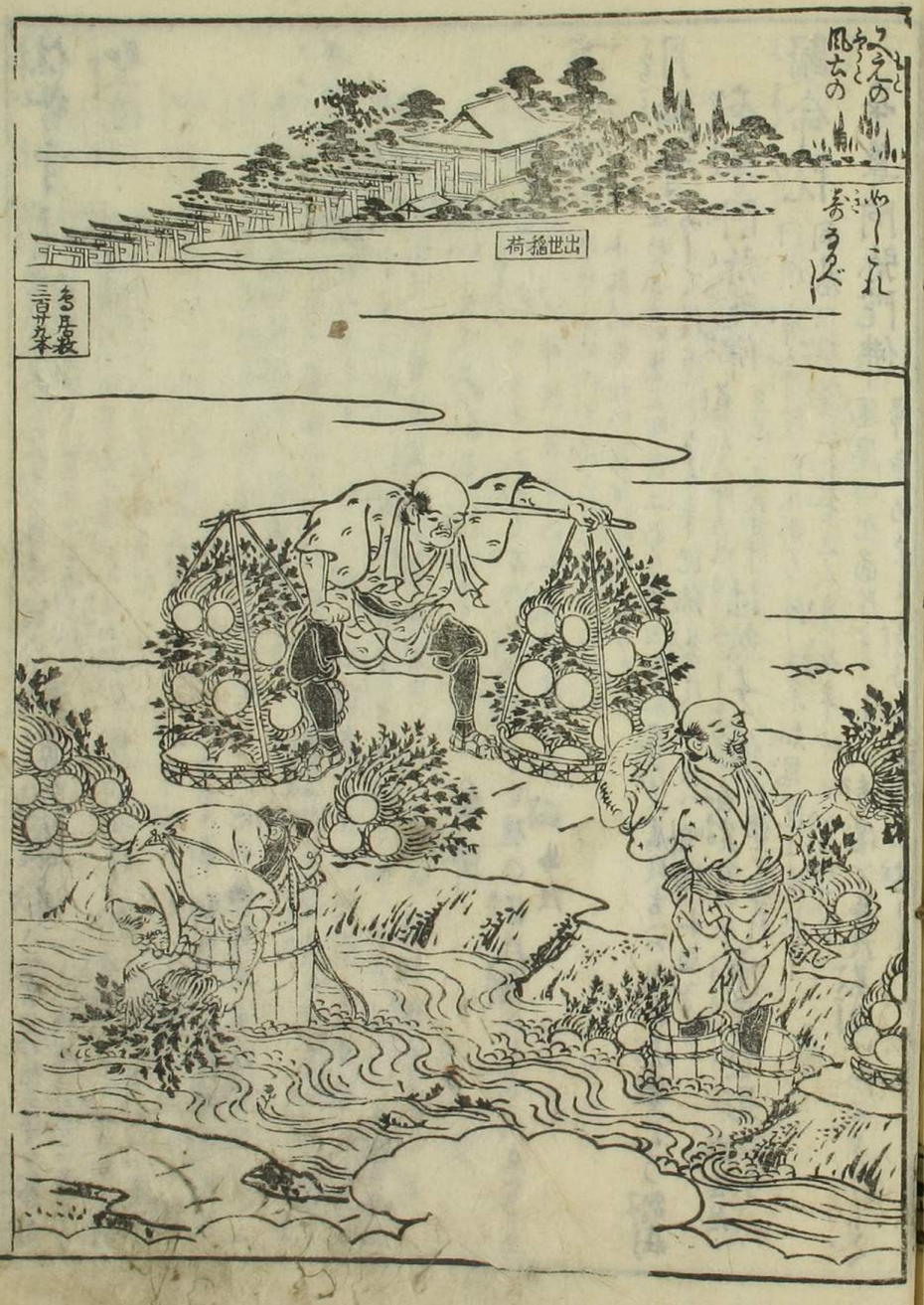
三寶寺 三條通大宮の西にあり淨土宗百万遍に属に
開基ハ筑公上人文明十六年乃建立なり
本尊三尊佛 阿弥陀ハ慈覺大師の作立像三尺餘 十一面観音 聖徳太子の御作
脇士観音勢士ハ安阿弥の作之 立像五尺
勢至菩薩 黄金佛立像 圓光大師像 自作坐像 地藏尊 惠心の作坐像
三寸計 三寸計 三尺計

正運寺 四條坊門大宮の西にあり淨土宗黒谷に属に寛永十年の草創なり
本尊阿弥陀佛 開基ハ源誉上人
観音堂 寺内にあり本尊十一面観音ハ和別長谷寺の本尊と同本同作なり
とぞ洛陽巡の第廿六番之

隼社 四條坊門千本通の東圃乃中にあり古へハ社頭巍々たり今小祠となる
延喜式云 左京四條坐神一座 新嘗 隼神社 ○三代實録云 貞観二年
六月十五日甲午授後院無位隼神從五位下。日本紀略云 天慶三年九月
四日奉贈左京正四位上隼神從三位。世人隼祓ハヤクサと謬て通称し
又謬て畧して瘡神ともいふ瘡毒平愈祈願の者土にて図子の形祓
もしらん土器に盛て神供と次ぬやしなる謬傳所々にあり是ありながら一位
再拝の謹啓ハ頭祓傾けぬれどなどの利生
なりしんや只世俗ハ循して信仰をなし

水蕊宮 四條の西千本乃東西の方圃の中にあり老杉一株の本に小祠を建る土人
午頭天王地を神といふ大内裏乃御時此所ハ水蕊町にして一叢乃
森あり或京祠の圖に水蕊町ハ朱雀通の東
四條乃西坊城の西綾小路北にと云云
新六帖 をしおしへの道をしまぬ菜葉にはつきりし沼のこなれも花咲にたり 玄蕃倉

水菜は京の名産之様に
洛西壬生の地は大味にして
根小く莖のもつ細く多く
あり故に千筋浮菜など
いへ一説に水菜にあらず
壬生菜なりとぞ畑より
ふく去ながら桐などの箱
に入れて封して廿日三十日
の遠遊へをしこれを開れ
水をそそけど　すこしも



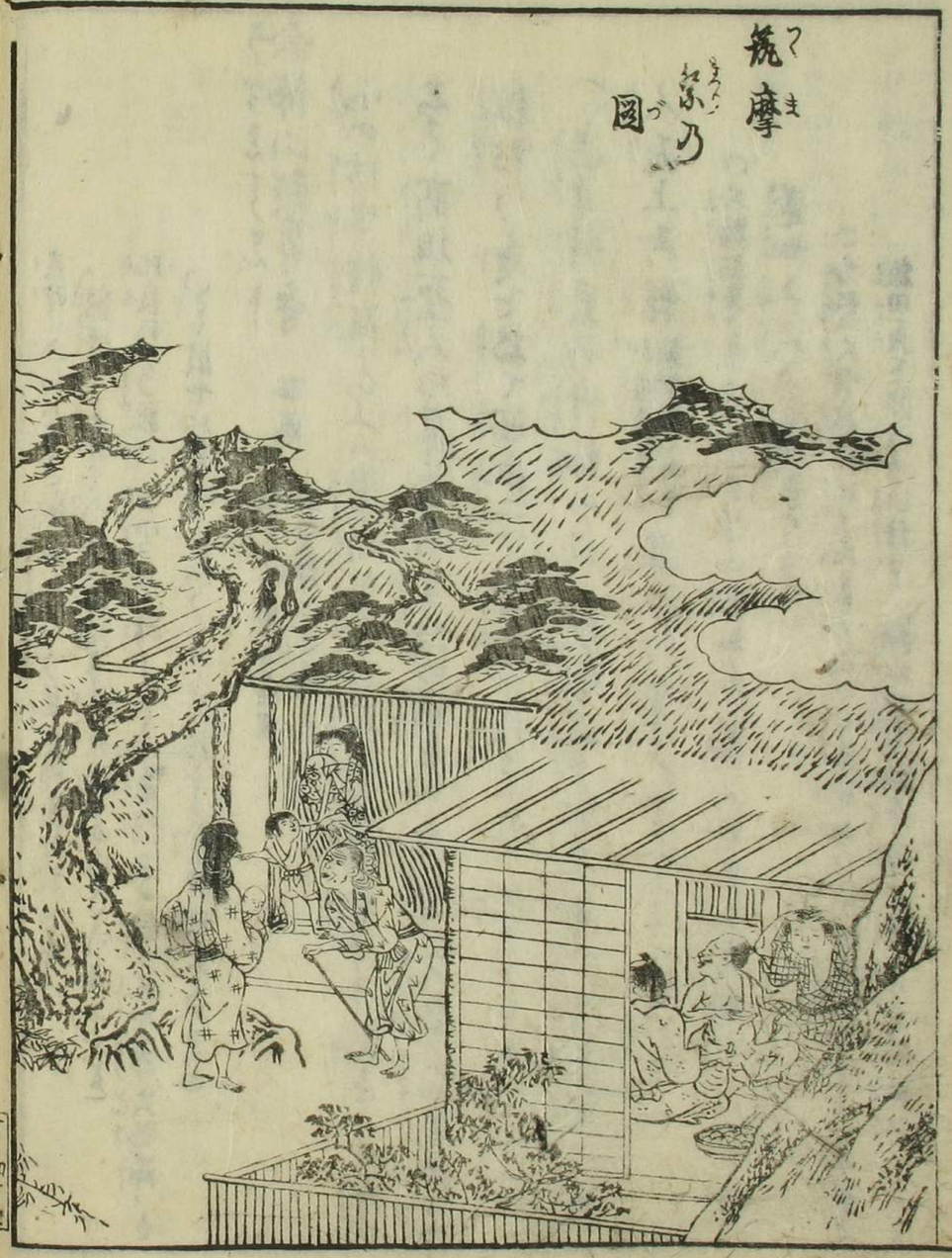
休勢寺　錦小路通大宮の西ふたまち許ふあり淨土宗西山派
開基ハ貢空景林上人寛永十年の草創之
聖徳寺　綾小路通大宮の西ふあり淨土宗諸寺ハ
古へハ眞言宗今ハ宗の祖貞安上人
聖徳太子四十二歳尊像　作自佗長一尺餘當寺ハ
繁昌人佗事場所より即佛寺とあり
新みて疱瘡祈願威應速なり
壬生鰐口鑼　壬生寺前綿ふとんより倒年二月大念佛の法會ふ堂おふ撞る鑼名
刻ハ鰐口ハ東山殿の御寄附なり　銘文ハ左の如し　六角堂　草創ハ詳ならず　再興之者誰の人此者佗國を逃憂を
物いとてみふともまゐよ　壬生念佛　江戸吟
壬生忠岑硯　壬生寺ふあり石ハ紀
一夜天神　壬生寺の門お民家の間ふあり
月輪寺　壬生寺の東三町許ふあり淨土宗知恩院ふ属ハ
本尊阿弥陀佛　貞覚大師の佗立像一尺五寸許　法然上人像　坐像一尺五寸許
歸命院　旧所ハ歸命院町ふあり淨土宗知恩院ふ属ハ
本尊阿弥陀佛　運慶の佗寺院より小児ふ香湯を出ふ業かいちもくしく
歸命の名ふ寄ふ世ふ名ふる

中堂寺　松原通大宮の西二町許ふあり淨土宗西山派
古へハ天台宗貞覚大師の開基なりしそ
長圓寺　旧所中堂寺の南ふ隣る淨土宗百万遍知恩院ふ属ハ
開基ハ大誉法巌和尚慶長十三年の草創之
観音堂　本堂の小ふあり本尊観世音ハ慈恵僧都の佗立像一尺五寸許一條院御宇
長徳四年の冬疫癘大ふ流行て児童死ふる事限りしふ藤将軍
親爾とて人民ハ側隠ふたえず即厳窟楞厳院乃僧都恵心ふこれ佗彫刻しあらえ
しうば正観音佗影刻しあらえ
止ふ諸人安堵しけるそれより年久しく厳ふふあり
寺大誉上人ふ請ハれ寺領ふ乃霊告ありて厳峯ふ光ふる佗立像
ふて安置ふ洛陽殊ふありの
廿廿四番ハ次
本圀寺方丈　當寺の圖前編ふ見へたり
水戸黄門光圀卿の筆ふ乃書圖ふ永徳の筆ふ山水ふ初ハ江列安土城ふありし佗
大和中納言秀頼卿の館ふうつしふ其佗尚もふふうを
人麿社　方丈の小ふあり初ハ紀貫之の勧請之後成郷も亦る信一ふして社
号ハ貞和二年當寺佗繍倉より荒廃しけるふ其後再営しけれふ
足利尊氏公神祠佗
幻ねの柳ふ浅む根をそふろむうら乃人丸の塚　尊氏
○茶亭　方丈の裏ふあり　古田織部のぬし
○雛形石燈籠　方丈の庭ふ假塾手洗鉢　旧所ふあり
○駒繋松　旧所ふあり尊氏公駒を繋ふしふ
○馬駐場　大客殿の東萩の中ふる巻四十間許
左右ふ封疆あり尊氏公競るあふし所之

○夕顔曼陀羅　日蓮上人の筆本圀寺蔵二の什宝として著具（聞）録あり　○狗畫　宋徽宗帝
夕顔の陰述あり尊氏公陣羽織の切うつしを
○大黒堂　本堂の北にあり大黒天立像二尺許寺記曰天正中北条氏勝と特
来く貫んしてより其宿所なくして其所のさま昭栖上人霊像うれえ給ふ求む老翁乃曰貴へ
明日得べしと其宿所なくして其所のさま昭栖上人霊像うれえ給ふ求む老翁乃曰貴へ
夕具後再び来る依故ふ茅神の像化とおれ
ぬさくさ北野の松乃下伯居宿を葉れかげの茅原

○亀井　本堂のあふあり上古ハ○是より本圀寺塔頭の名蹟旧記に
田面清水と云
○福大明神社　勧持院ふあり系祢紀貴之の霊みてく衣冠の木像と天文五年
再び當院ふうつし社祝建て安置と上洛の時々祭墨を
祢ふる翁しるい迎年祠祝俊補しるす
織田有楽祢手の湯ふ　多門院ふあり亀井と
可るりくそまり。　○本圀寺塔頭の名蹟旧記に
○松蔭井　持珠院。妙見堂　開眼之一秘仏所伝基日重上人の
○四観松　求法院縁堂の。金吾中納言秀秋廟　瑞雲院ふあり又佛殿ふ新像祝
東南ふあり　安置ふ秀秋卿ハ本下肥後守
家定乃五男ふて初ハ秀吉公乃養子と成後ふ小早川隆景乃名督と次慶長
八年廿一歳みて早逝し瑞雲院殿秀巌日詮と号に
○烏帽子石　真如院ふあり形烏帽子乃ごとし寺記曰永禄之年の云頃剣ふ
志賀郡大物浦ふ
ありく本圀寺ゆえ天下安全乃祈禱旅僧せしむ其石足利

念佛山超寿寺　西流
小の坊宝幢院とよへい常州下妻西本山光明寺より別とする寺と
ありく高祖聖人の真筆明空坊の流とよとうえ常州完戸唯
信坊乃庵と称て西流二十に坊筆の内筆二十番之ともに
○歯寺傳来の什物ふは○親鸞聖人御真筆十字名号○聖
人充上御報　御縁書ふ　蓮如上人御筆　其外什宝多しとうえ
○大物詣寺より二里半小お坪ふ村ふ現当山宝勝寺とうえあり
蓮如上人の舊地なり
○白髪大明神の社ふ比良乃山心の尾波ふ巳の渓通よりあり柔神ふ
猿田彦を祢りり山傳より湖水一面の眺景竹生嶋多気嶋沖嶋もへう


筑摩
紀の
図

風名云爭にのぞむ
○ほど十八神村ゝゝろの側ゝ石佛あり紀基善薩の他ろうろうかゝ
ゟ三十又神をねせろ

願教寺 東流 折坂しより七里山
院家 海津ろうろうあり

齒寺ハ高祖聖人越後へ左遷の御附ゑよせ給ひし事其附ゐ
真言宗そありしうど改宗し
寺内ゟ七百年を経うる梅の古樹あり

朝日山稱福寺 西流 海津より三里ま小湖みの渡遠浪郡
月出村ゟあり則竹生嶋の小の方ゟり

齒寺ゟ二十ほど攀ゟ屬ゝ関東よりのり寺ゑとゝろ
此地ほど方ゟ村ゟゝ唯此一村のこありて閑靜の地なり東面ハ湖水ぶく
とゝろく伊吹志津嶽の峯ゝし遥ゟ見西南ハ竹生嶋中ゟ獨立
ゝ緑樹の蔭水底ゟ小浪ゟ風系漁ゟ称ひ多紀勝地なり
竹生嶋ハ淺井郡の湖心ゟあり五町ゟ五の一つゝて漁ゟ石恩誌の靈地なり
壽石水晶宝珠とまじ日本

所為ふ非ざ一兩小童部の候ゟ憚とゝて自然住るまふや候らん大
学寮の南門の東脇ふあん徒うる地の候ゟ其所へ死渡らん如何ゑ申ゞ
宰相のゑ速ふ一族引連を其所へ渡れ其所翁嘻しゞふ小童部ゟ早々
我ふ隨ゟく退候へゟ聲高くゟゞ姿ハ見ゟゞゟも四五十人計のまるん頭
ゟ答々ゟ殿后よりをは家松ゐみし造ゟせて例のやうふ住をまひある
三若法師の家ふ住し化物の画をゟく物系松よ多
化物の根松翁もろそけてもろ

堀川御所源義経館 東ハ油小路西ハ堀川を限ゟふ堀川を隔て西ハ
堀川御所として今醒井通五條の南ゟ五條の間之原ゟ地ハ後白川法皇
の形庭石遺し系あり是ゟふ殿舎の内ゟ法皇ゟる信一ゟうしく殿内ふありし之今
南小横町ゟりふあり文治の比判官義経忽ゐみ
○百練抄ゟ文治ゑ年十月十七日今夜子の
より堀川寄て夜討の企あり義経忽ゐみ
○平家物語八坂本ゟ土佐坊昌俊ゟ手
御所ゟ押寄ゼ油小路ゟる義ゟをぞうち
○一説ふ今の本園寺方よの地堀川御所
直義の下知状曰六条法華堂屋敷ハ南
ハ御所の北旧堀筋堀下畧法華堂ハ今
堀川ゟく御所の要害ふ設ゟ所ゟり

源頼義家 旧油小路左女牛町（今の花屋の前ふあり初ハ耳塚町と云ふ）伊豫守頼義（詔ふけて永承五年より奥州ふ下て前九年後三年乃合戦ふ生しのち）宗任故誅し貞任故生捕しく上洛し勅して佛門ふ入永保二年ふ往生しのち久くふり

長明發心集ニ

伊豫守源頼義ハ若きより罪をのこ作つて孫も讒愧のふかりけり況ヤ奥ふ向ひて十二年の間謀反の輩を滅し巻る余殃をや原因果のさらり空しからん

地獄の報疑ひふりんとふくふみのこの入道こそ先立く世をそむく者ともろともおひつゝ此世の垂ろれ罪の報乃地そくべきやんどそ聞て忽發心しく

一筋ふ付け極楽を願ひけりかの貧婆入乃造ろ堂ハ伊豫入道乃家の向ひ

俗女牛西洞院之第淋堂こそ近くそありけれ

八伊豫入道頼義奥州の陣ふ在ける時ハ囚を平く後建之せり十二年の間戦場ふ詰きり下ふ堰るより耳納堂といふみのこ堂こそ俗の事ふやニ

下間家 本領寺房官みて東西六條ふ其家多し遠祖ハ播津守源頼光五代乃苗ニハ守頼綱の孫兵庫頭仲正が子源二位頼政より氏人ハ馬場ふ殿ハ頭と号ハ馬場ふ縣下間ニ部大ハ内等の祖之頼政の子孫伊豆守仲綱ふて其子兵庫頭宗重も召捕まこ糸にふて放て誅ふ刑せらんとそ時ふ親宮聖人氏新を通りけり宗重が命を強ふ惜く

西洞院ハ東西ふ通ハ道如上人の代ふ至りて往ふ孫の家繁栄しく北國方代

通へ加賀の二到ふ勇威ふ着ひて大坂石山作堂の時信長と氏苗孫数宮乃義ひて天

名ふ揚しゝ

信長記拾遺ふ見へたり

桂宮 舊ふハ七条坊門今ふ通西洞院ふ比頼ふ氏園の隣師茶り氏樹ふんて桂宮とくつけり

吉田織部京庵補 西洞院ふ小路茨内の茶亭之織部全ふ後の初氏家ふ遺ふ脇の茶亭乃ふり燕庵といふ額ふり瑞光庵の筆之ふのあり

おとゝやふひを利休の害ふそろ戸下しふ小祉三ツと代ら見ところ也其外八汲法観ふの名器ふ多し

天橋立 旧ふハ今の東本願寺御堂の地より小祉ふ在石三ツ小祉ふ在石の名を異祖飯仲千利休之ふの名器ふ多し

本願寺建立の時多く埋ら氏今東本願寺御堂の地より小祉ふ在石三ツ小祉ふ在石の名を異祖飯仲千利休之ふの名器ふ多し

資近郷の時社殿舎の名之ふるより清補の礎ふみふんへり

本宮末社 東九條村守賀辺より田圃ふあり

世の人判官塚と云ふ

社地あり

新宮末社 本宮末也二町許ふあり氏新九條殿の廢祠

世人判官塚と云ふ

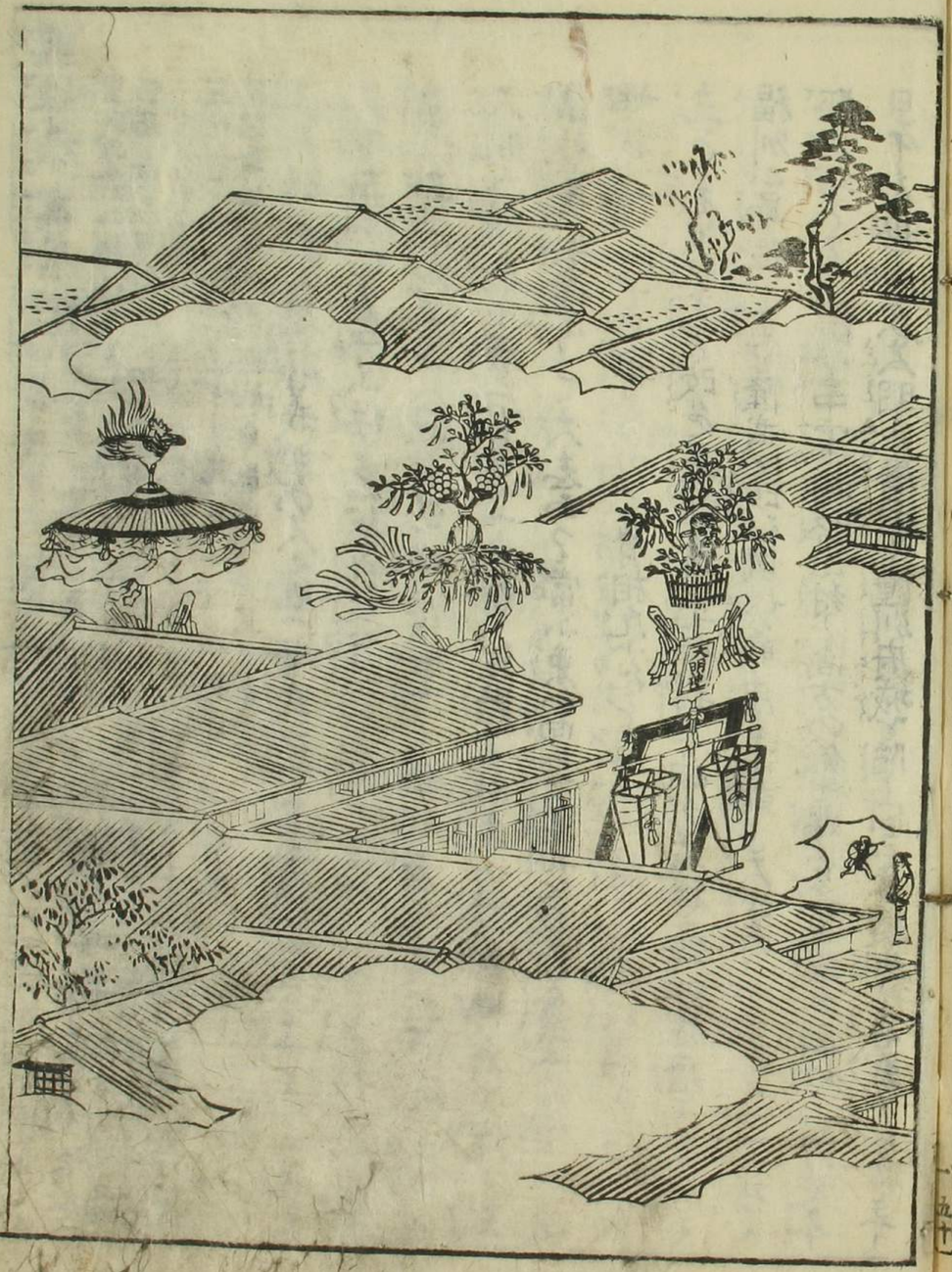
施薬院末社 東九条村鳥丸の北ふあり

阿佛塚 六孫王六連ふの外戚の方

鎌倉石大倉實朝塚 前編ふ見へたり

東寺神供 毎年四月初卯日稲荷例ふ依ふ五社の神輿氏東は金堂のおこまふくま伝堂ふ法

神供ふおこなふ氏東寺古老より例ありしぞ



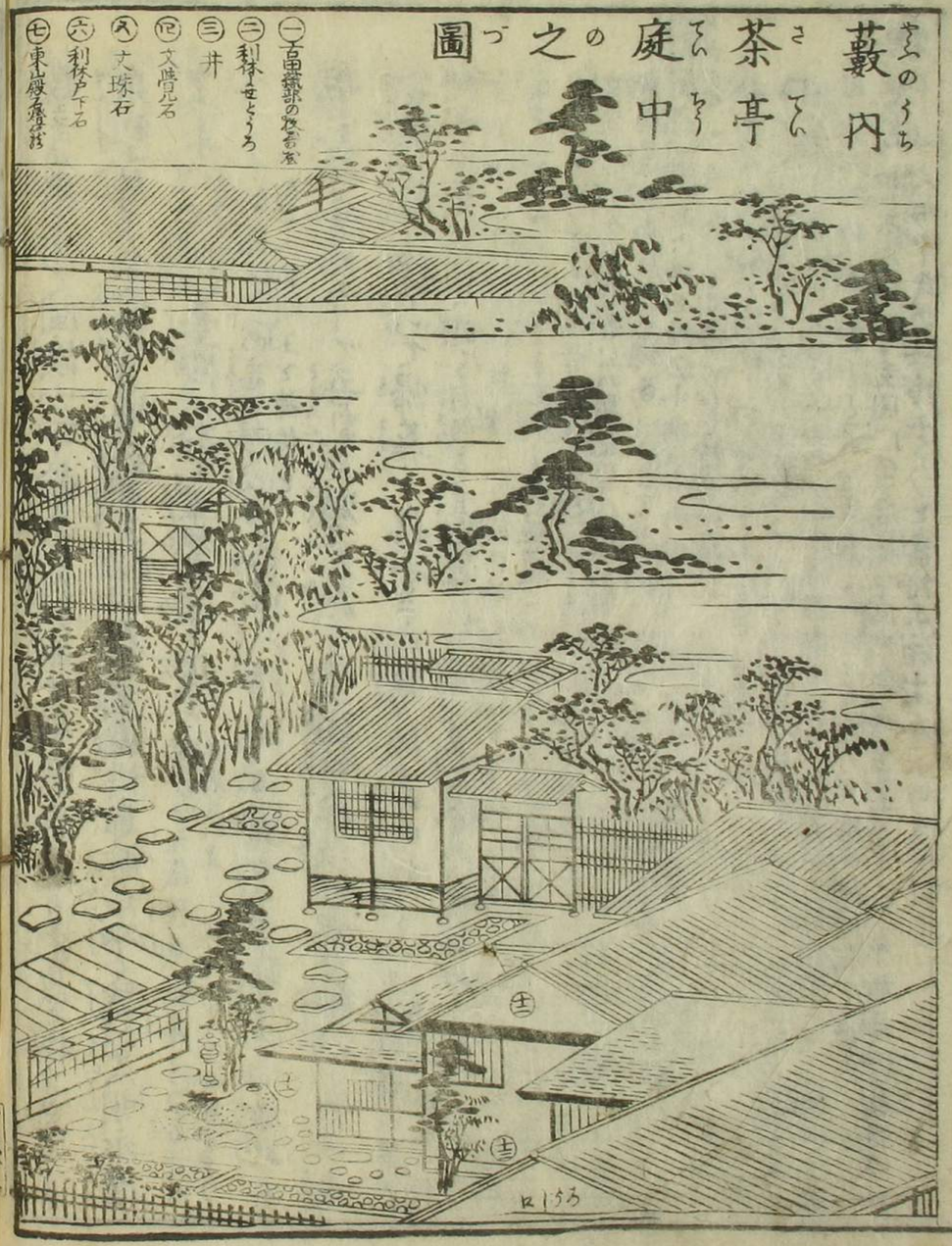
稲荷師迂挑燈

國姓爺寓居西六條本願寺興隆寺の地と或る曰初め所は本願寺の
傍人七里氏の宅地と國姓爺が寛永十年日本に生まれ若年より七
里氏の家に寄宿し武術を練し壮年に至って中華に渡って大明九世
唐王の旗下に錦の旗を自筆の書翰を添て酬恩のために
ふ七里氏は仏奇ふ西本願寺の寶庫にあるとぞ一説に渡世は錦の旗
城功烈云てこの寺のやなかに
清閩海鄭居仲著國姓爺鄭成功傳其大意ふ曰
夫國姓爺の忠精義膽の人と姓の鄭氏初の名が森字が大木といふ父を
大明泉州の大守ふ仕て名を芝龍字を飛黄と號ふ一年落魄して漂
泊の身と成日本へ渡て倭婦松娶つ芝龍が祝
大明へ帰国し厥后日本へ金幣を貯て壮年の時國姓爺を迎ふ凡
儀整秀俶儻にて大志あり常ふ東ふ向て其母をこむ金陵の術士國
姓爺が相を観て必奇男にて骨相凡ふ非ず命世乃雄才ふ其に福王の江左に
立くえ弘光と改元芝龍字を南安伯の封ど明の大祖九代の孫唐王を迎く
福州ふ即位しえを隆武と改む國姓爺唐王ふ謁し王乃姓朱の字を賜
鄭成功と号し御営中軍都督の印を授け尚方の劔を賜ふ堅き海外國姓と称ず
日本乃母を迎ふ大明永暦二年潼列府城を陥し同七年鞭韃と合戦し同五年

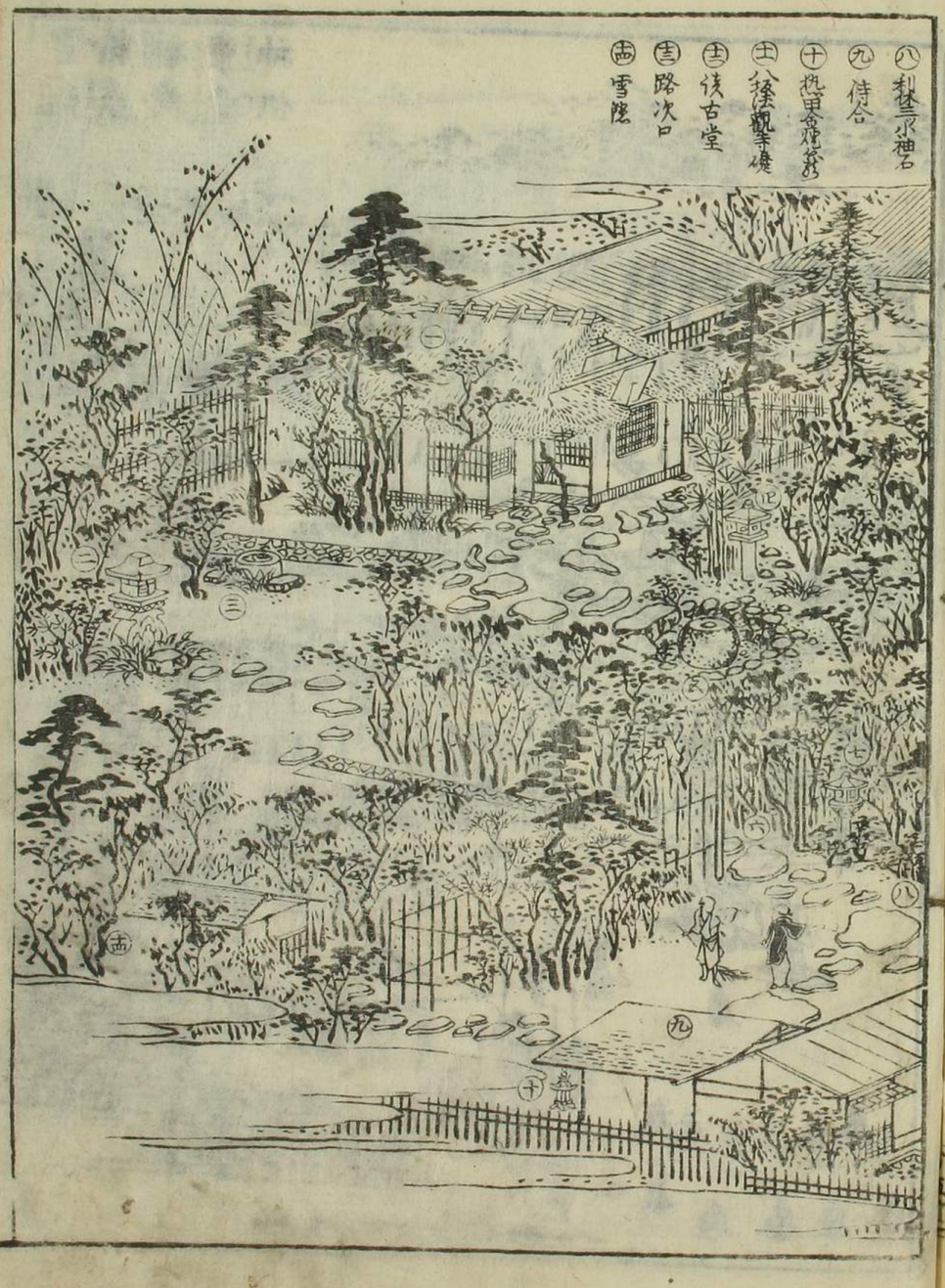
数奇策を用て閩澳ふ二十餘萬の兵を率て韃朝を攻る事数度ど同十年に
泉州ふ於て大ふ會戦を遂ふ延平王招討大將軍國姓爺鄭成功と號し大明永暦
十六年日本寛文二年ふ當る臺灣ふ於て軍務の労浸を生じ二十九歳隆武元年より起つく
成功乃鄭経よの志を継て公乃具後大清二代康照皇帝詔して曰成功を
明室乃遺臣ふして吾亂臣賊子ふ非を故ふ國姓爺及び長子鄭経と共ふ南
安縣ふ於て禮を以て葬し給ふ事田横が故事の如しと云
源頼光館西六條七條の小興正寺の傍人下間氏の地と相傳ふ大江山ふ酒呑童子あって
勅免を不意ふ蜂起して擾敗し討ふせられ若鬼神神通旅得て山言葉を
以て多田滿仲公乃長男と代々天下守護職の家ふ伝ふる所の鉄切丸
金を下して重宝をそ滅さんや當家の重宝ふ伝ふる所の源氏の
にふ画圖の一巻ふ書しとぐくり今ふ猶存ふ
猪隈社初ハ西本願寺玄関門のお西側下間刑部卿
人田中氏の社地ふうつを稽地ふ祖木今ふあり

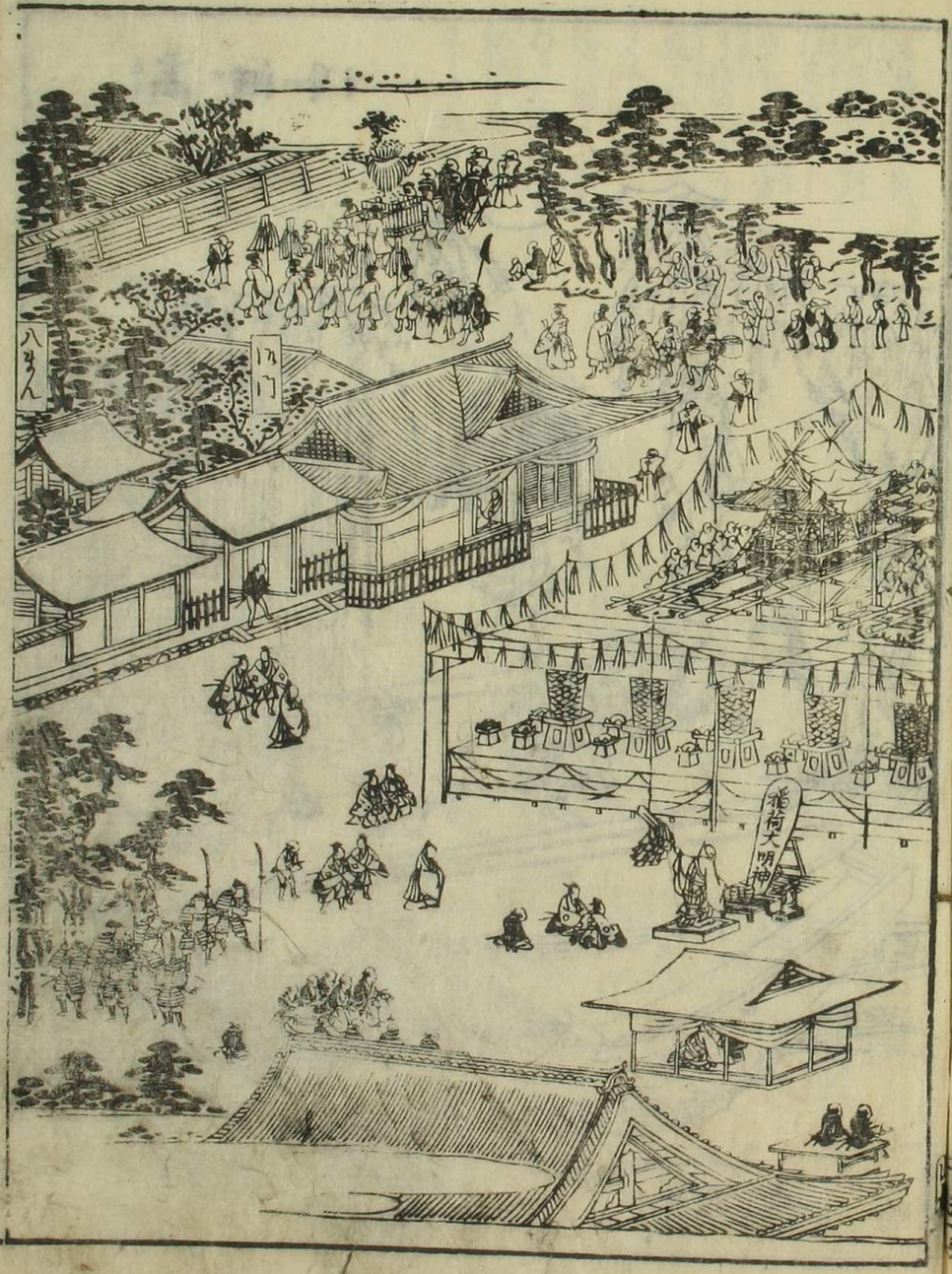
藪内茶亭庭中之圖

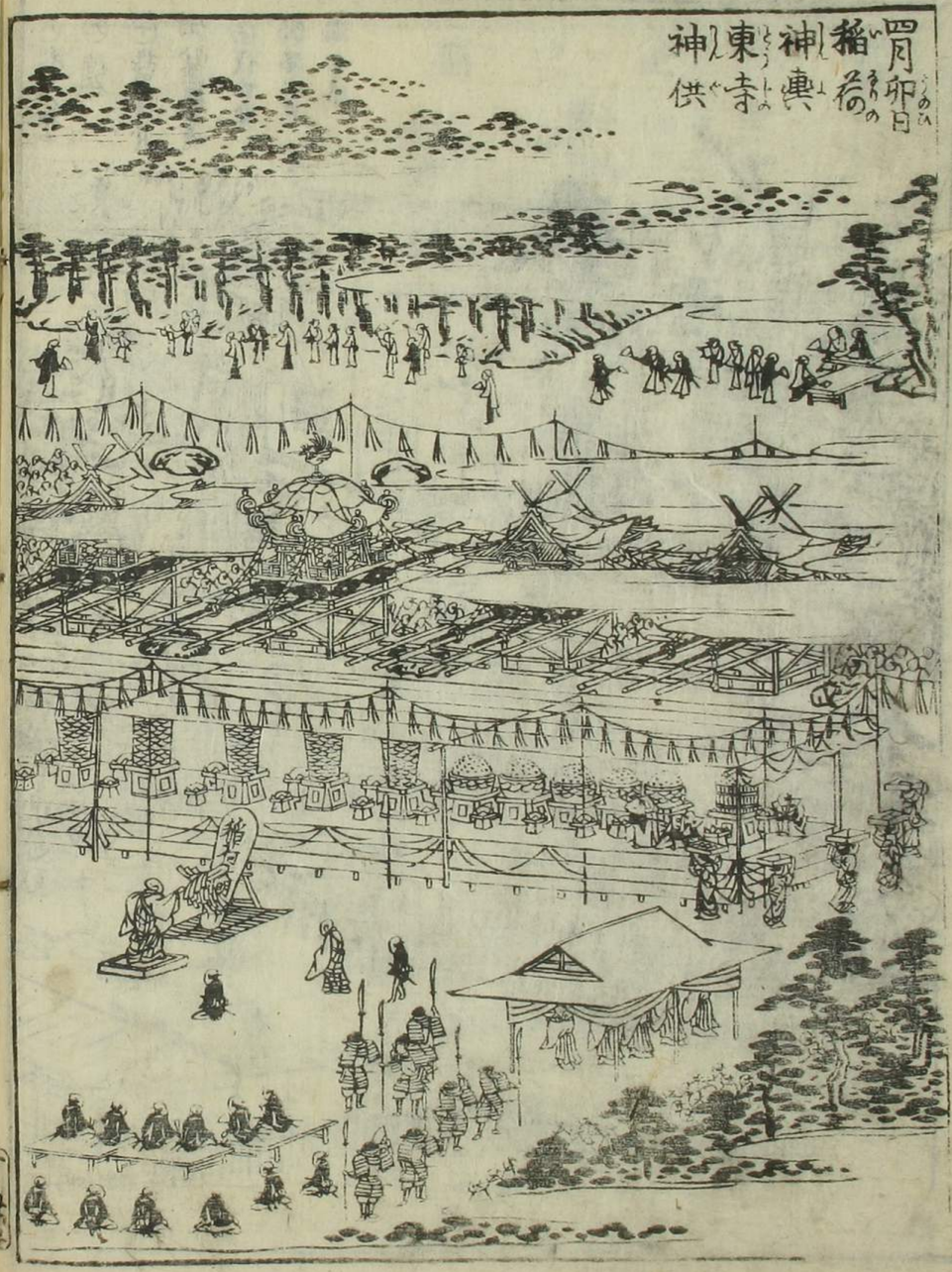
(一)古田織部の牧舎石
(二)利休ゝせとうろ
(三)井
(四)文覺九石
(五)文珠石
(六)利休戸下石
(七)東山殿石燈籠

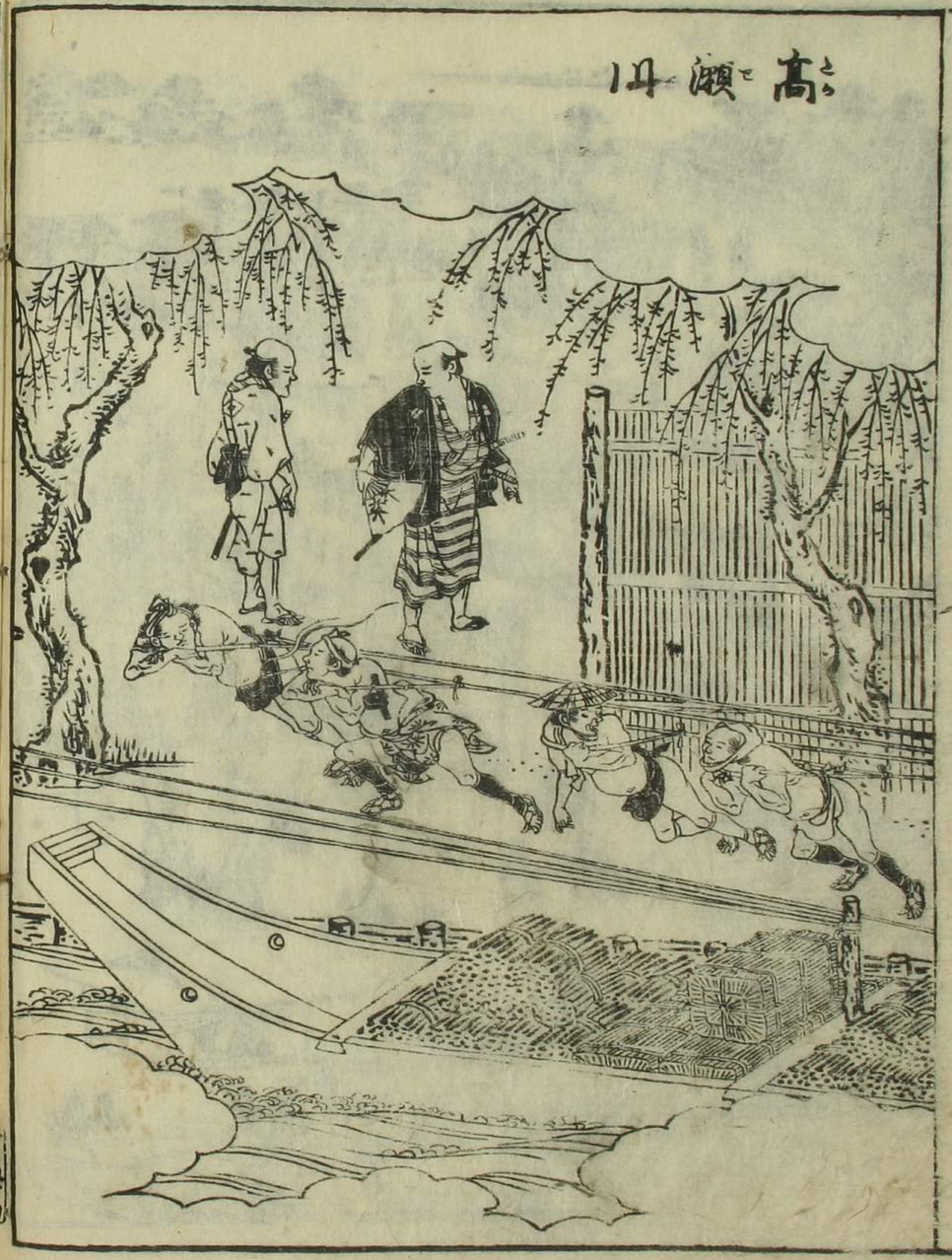


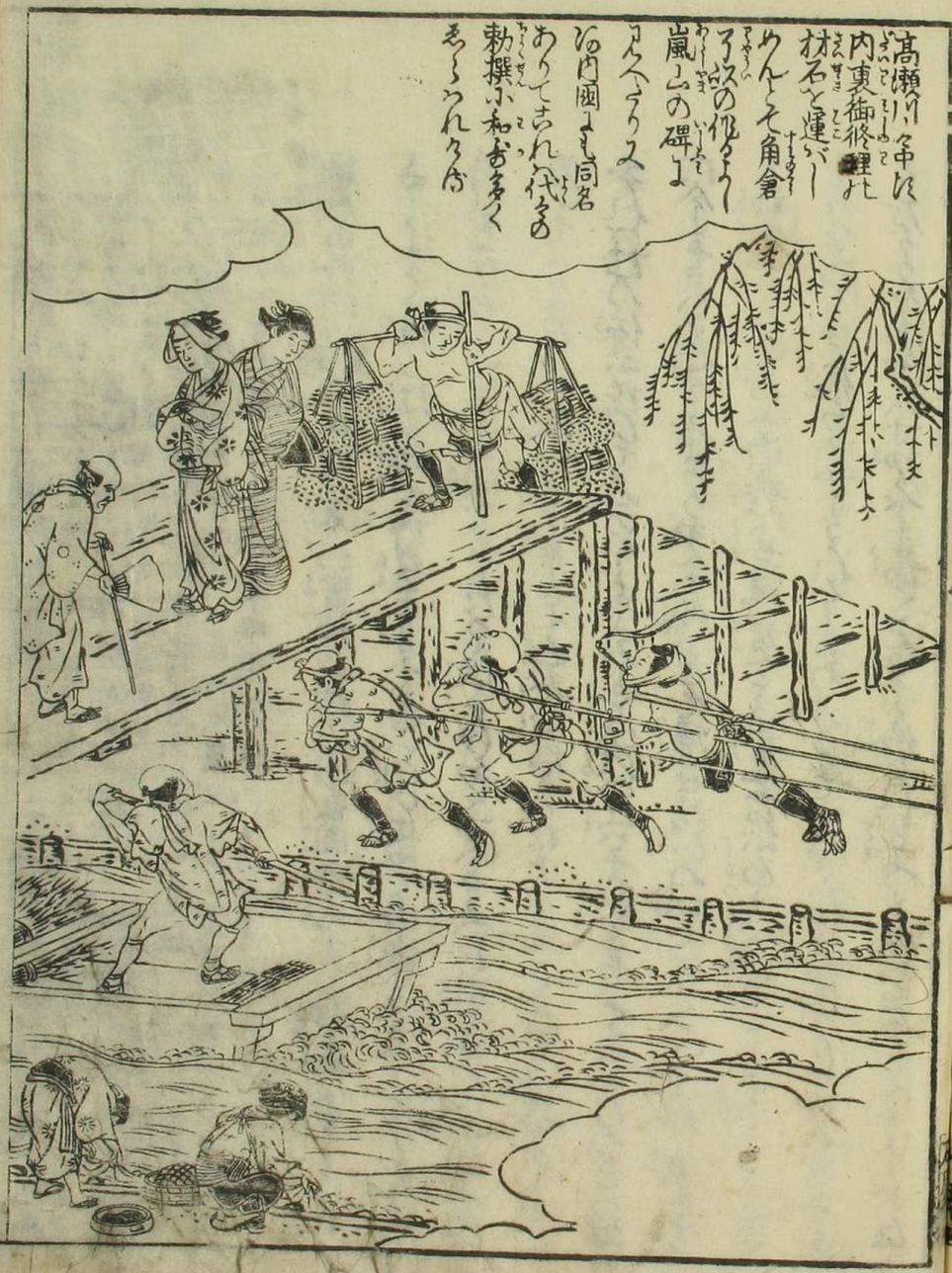
(八)利休三水神石
(九)侍合
(十)熱田金燈籠
(十一)八塚法觀寺礎
(十二)後古堂
(十三)路次口
(十四)雪隱




八まん
稲荷大明神


四月卯日
稲荷
神輿
東寺
神供


高瀬川


高瀬川の事は
内裏御修理の
材石を運ばし
めんとそ角倉
了以の作るよし
嵐山の碑に
見へたりし
この内國にも同名
ありて古れ代々の
勅撰に和お多く
見へられたり

羅城門 大内裏の御時平安城外郭南面の正門にして朱雀通（今の千本通なり）九條大路に有り今四ッ塚の民家東頬の奥に礎石遺とゞまれり日本紀に曰天武天皇八年十一月初て難波の都に羅城を築くとあり作羅城の名義は三代実録及び拾芥抄に其説詳ならず按ずるに東涯制度通に曰通鑑唐懿宗紀に不穀時就克羅城胡三省が註に羅城とは外の大城なり又唐書高祖本紀曰築京師羅郭起観千九門又朝鮮の蒙字会に曰外郭称羅城是按外郭の番兵を羅卒といふ羅絡の義なるべし此説によりて羅城の名義諦めして平安城總郭の門といふ事なるべし

小世継物語曰

柏原の御門（桓武天皇）の御時に平の宮作らせ給ふ間長岡の京より時に行幸してわたらせ給ふ都を御覧ずるにこの門の辺にて御輿をとゞめて多く見て作りまさるものはよく門ぞかし但此門一尺さがりたれ風に倒れぬべし屋にそへたれば風の為に危ふし今は高くさげて防がんと仰せられば此の仰に従ひて左のかどへうつるとて此の工はそれをおそれて上て门今一尺高くせばよからんと仰せ給ひて帰らせ給ひぬ抑其後遷都近くなりて初の如く門のおもて御輿をとめて御覧ずるに屋根に白土皆塗てぞ金物までまれなる工を召て仰せられけるはかくありて一尺さがりたらんと仰せらるに今一尺切るべし高くみゆると仰せられば工の子まゐりひざまづきて申しけるは

あしくなりぬればおやさくいはんずるとて向せんには工少し下に居給ふ門の下に合せさぶらひて一尺切と仰られしが御門の御下切て後に天下あくまでも見ゆるやうにさぶらふ ゝ しく御門も思しめさるゝべしと申ひて一尺切てさぶらひし所見えさうらはゞ若き者の申す事と思ひたまひて其まゝにこそあるべけれど御覧ありける後悔をして申しひけるにかの御門に又寸かくして切さぶらひしとそれに今又寸と仰せられば御覧じてそこをひきてよそふに切る事なかりけるにぞ御門かしこくおぼしめされ御鑑にてそもそも切は都遷の日ちかくなりてえおはしまさぬ具をとめにある事なし但風にともすれば吹ぞふせんと仰せあるくは工はいよいよくしくさとりけり数の者も後々の世まで切さぶらひねば実にあやまる事なきと申けるかく都にありし後末の世まで三度吹きふされたる御門の御覧じたる本びかう也と申しけるとぞ其後は物の本に見えて侍る

ことに此の極楽院の御とき大風吹倒されて其後は終に建られざりし

洛外惣土堤 室町殿日記追加云天正十八年の頃豊臣秀吉公六十余州属御手四海静謐に治りしかば玄以法印法橋紹巴をめして潜に洛中の堺を御覧ぜられしに東は高倉より西は大宮まで南は大内の北の口へ遠く見へ渡りけるは平くして東山にとりつきて耕作の地と西は大宮まで

嵯峨右秦へ押通て田畠之南北の際も何とも堺もなく只田舎の立郷の如し歯舞を召
て花洛とハ昔より云傳へぬまでも京都の主横ハ立石に云しし小ハ何まこゝろ面も是
まぞとゝ洛中洛外の堺を末代之相定べし郡乃旧記をきゝかもやと仰出されたまハ歯舞
畏て釋せしまゝなるハ極武天皇延暦三年奈良の京より長岡の京へ遷ひて十年にて
當国葛野郡宇多村を見せるに四神相應の地之とゆにより愛宕郡に属また同十
三年此京へ極るに云云油小語を中に立て條里を割るに東ハ京極之小ハ鴨口面ハ九條を
を九重の都と号せり油小語より東ハ左近西ハ右近とゆ右京ハ長安左京ハ洛陽と号に
されば内裏ハ代々にて替とゆせしも洛中洛外の堺ハ郡も遠ふ事なし云云法住院常徳
院の時代より此京に養ゆ屋をもすれば戦場と成に付て万民銀板止に郡鄙の往来なれば
よりて自愛宕をと呼び秀吉公呼名てさしらば先洛中洛外を定へしと諸大名に仰付られ
東西に土堤をしたせ給ふ扨一切の寺院洛中に充満て在家に並びたれば洛若院に仰付て
諸寺ハ京極より一町東へをし出して小ハ鴨口より面ハ六條まで行面に屋敷をもとさるゝと云云

補遺都名所圖會平安城之巻 畢

尾崎